

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

Battle Spirits ~The hero of moonlight~

### 【作者名】

クロコッペ

### 【あらすじ】

神々の砲台でのラストバトル。それに勝利したのは馬神弾ではなく月光のバローネだった。引き金となったバローネが飛ばされた世界は『バースト』というカードが使われている異なる世界。大きく湾曲した運命。回り出した宿命の渦。

月光の覇者はその世界で何をみるのか。

にじファンで掲載していたものを引っ張り出してきた古い作品です。

ソードアイズ、アルティメットゼロのキャラクターやカードは登場しません

## 薄暮

「アタックステップ！」

目の前の少年、馬神弾《ばしんだん》は威勢よく口火を切った。

「射ぬけ！ 合体《ブレイヴ》スピリット！」

主から命を受けた光龍騎神は足元の砂を蹴散らしバローネのスピリットへ向かって駆けていく。

「アタック時効果！ BP10000以下の【魔羯邪神シュタイン・ポルグ】を破壊するー！」

【光龍騎神サジット・アポドラゴン】コスト8/4 「系統：光導／神星」

1 LV1BP6000

3 LV2BP10000

5 LV3BP13000

LV1・LV2・LV3

このスピリットはブレイヴ二つまでと合体できる。

LV1・LV2・LV3

【系統：光導／星魂】を持つ自分のスピリット全ては、アタックする時相手のスピリットを一体指定し、そのスピリットにアタックできる。

LV3【合体時】『このスピリット合体アタック時』

このスピリットのブレイヴ二つにつき、BP10000以下の相手

のスピリット1体を破壊する。

光龍騎神の放つ炎の矢がシュタインボルグを撃ち抜いた。が、まだ攻撃は終わらない。

弾はマジック【サジッタフレイム】を使う。天から現れた無数の炎の矢がバローネのネクサス【闇の聖剣】を焼きつくした。

### 【サジッタフレイム】

フラッシュ・BPP合計5000以下まで相手のスピリットを好きなだけ破壊する、または相手のネクサス一つを破壊する。

「ちっ、またしても……」

破壊されたネクサスを忌々しそうに見つめるバローネ。

「まだ終わりじゃない！ マジック【バーニングサン】を使用！ 【アポロ】と名のつくスピリットにコストを支払わず、手札からブレイヴを直接合体《ブレイヴ》させる」

### 【バーニングサン】

フラッシュ・自分の手札にあるブレイヴカード一枚を、カード名に【アポロ】と入ってるスピリット1体に直接合体するように、コストを支払わず召喚し、そのスピリットを回復させる。

弾は手札から【トレスベルーガ】を光龍騎神にブレイヴさせた。【トレスベルーガ】と合体した光龍騎神は黄金の甲冑を身に包み、手には巨大な剣《つるぎ》を携えバローネを襲う。

バローネは軽く舌打ちをすると、

「【蛇皇神帝アスクレピオーズ】でブロック！」

ブロック宣言をし、蛇皇神帝のカードを傾ける。

「【獅機龍神ストライクヴルム・レオ】の効果発動。【系統・光導】を持つ【蛇皇神帝アスクレピオーズ】が疲労した為回復。行けっ！ アスクレピオーズ！」

【獅機龍神ストライクヴルム・レオ】コスト8 / 4 「系統：光導 / 神星」

1 LV1BPP6000

2 LV2BPP9000

4 LV3BPP12000

LV1・LV2・LV3

【重装甲・紫 / 緑 / 白 / 黄】

このスピリットは相手の・紫 / 緑 / 白 / 黄のスピリット / プレイヴ / ネクサス / マジックの効果を受けない。

LV1・LV2・LV3

このスピリット以外の【系統・光導 / 星魂】を持つ自分のスピリットが疲労した時、このスピリットは回復する。

LV3【合体時】

【系統・光導 / 星魂】を持つ自分のスピリット全てに白のシンボル一つを追加する。

光龍騎神と蛇皇神帝は空中での取っ組み合いとなり、蛇皇神帝の無数の足が光龍騎神の身体を抑え付ける。身動きの出来ない光龍騎神

に蛇皇神帝はとどめの一撃を放とうとした。

が。

光龍騎神の内《うち》からみるみると光が溢れ出したかと思うと、辺りをカツと強烈な光が照らす。その眩《まばゆ》い光は至近距離にいた蛇皇神帝の目を潰した。

その瞬間、光龍騎神は身体を縛っていた触手が緩んだのを確認すると一気に薙ぎ払い、一旦距離を置いたため後ろに下がった。

ズサザザア!! と激しい砂ぼこりを舞いあげながら着地した光龍騎神は目の前の敵を、目を押さえ怯んでいる蛇皇神帝を見据える。

ザン! 光龍騎神は炎を纏った剣を縦に薙いだ。剣の先から出される衝撃波はそのまま直線上にいた蛇皇神帝を一頭両断にする。

「グオオオオオオオ!!」

光龍騎神は雄々しい咆哮と共に蛇皇神帝の元へ飛び込んでいく。そして思いつ切り剣を振りかざし今度は横に薙ぎ払った。

十字に刻まれた蛇皇神帝は最後の力を振り絞って雄叫びをあげると

ドゴオオオオオン!!!

激しい轟音と共に光龍騎神の後方で爆散した。

「更に【輝竜シャイン・ブレイザー】の合体アタック時効果発動。ライフを一つ貰っ」

【輝竜シャイン・ブレイザー】「系統：星竜／機竜」

0 合体BP+5000

【合体時】『このスピリットの合体アタック時』

BP8000以下の相手のスピリットを破壊した時、破壊したスピリット1体につき、相手のライフのコア一つを、相手のリザーブに置く。

光龍騎神の刃が再びバローネに向く。光龍騎神はそのままバローネのライフを1つ削りとった。

【バローネLife】 3 2

「ぐあッ!!」

「合体スピリットもう一度アタック！ 行けっ！ サジットアポロドラゴンー！」

「指定アタックは使わなかったか……否、使う必要がないといった顔だな」

光龍騎神のシンボルは3つ、バローネのライフは残り2つ。

そしてバローネのフィールドには獅機龍神しかない。つまり、ライフを守りきるには獅機龍神でブロックするしかないのだ。

射手座と獅子座。弾とバローネのエーススピリットが激突する。

光龍騎神は刃を構え、獅機龍神はそれを迎え撃つかの如く雄叫びをあげる。

「更に【トレス・ベルーガ】の合体アタック時効果発動！ 自分のデッ

キを6枚破棄することでBPを+6000！ 破棄した中に【白羊樹神セフィロ・アリウス】があったので合体スピリットは回復する！」

【トレス・ベルーガ】「系統：異合」

1 LV1BP6000

0 合体BP+6000

【合体時】『このスピリットの合体アタック時』

自分のデッキを上から6枚破棄することで、このスピリットのBP+6000する。

この効果で【系統：光導】を持つスピリットカードが1枚以上置かれた時、このスピリットは回復する。

【光龍騎神サジッタアポロドラゴン】 BP13000

+ 【輝竜シャイン・ブレイザー】 BP5000

+ 【トレス・ベルーガ】 BP6000

+ 【合体アタック時効果】 BP+6000

合計BP30000 シンボル3

「だが……俺の【ホーク・ブレイカー】の効果を忘れた訳ではないよな」?

バローネは弾に真意を尋ねた。そう、【ホーク・ブレイカー】のブロック時効果はバトルしている相手のシンボルの数だけBP+5000。つまり光龍騎神をブロックした獅機龍神は同じBP30000になってしまふのだ。

「ああ、わかってる……このままだとBPは同じ30000、相打ちになっちゃいます。だが」

弾の目はまだ諦めていなかった。

「これで終わりだと思っなッ！」

勝利への欲求が彼を突き動かしていたのだ。

「フラッシュタイミング！ ネクサス【光輝く大銀河】のレベル2効果発動。手札にある【系統・神星ノ光導】を持つスピリットカードを破棄することで、このバトルの間BPを+6000し、赤のシンボルを1つ追加する」

【光輝く大銀河】

0 LV1

手札にある【系統・光導】を持つ自分のスピリットカード全てのコストを5にする。

2 LV2

フラッシュ：『お互いのアタックステップ』自分の手札にある【系統・神星ノ光導】を持つスピリットカードを破棄することで、このバトルの間BPを+6000し、赤のシンボルを1つ追加する

弾は【太陽龍ジーク・アポロドラゴン】を破棄し、合体スピリットのBPを更に+6000した。

【光龍騎神サジッタアポロドラゴン】 BP13000

+ 【輝竜シャイン・ブレイザー】 BP5000

+ 【トレスベルガ】 BP6000

+ 【合体アタック時効果】 BP+6000



+ 【光輝く大銀河レベル2効果】BP + 6000 シンボル +

1

合計BP 36000 シンボル 4

「ふっ……BPを上げてきたか。ならばこちらもいくぞ。【ホーク・ブレイカー】ブロック時効果発動！ ブロックしているスピリットのシンボルの数だけBPを+5000。 よって合計BPを+20000！」

【ホーク・ブレイカー】「系統：機獣」

1 LV1BP 7000

0 合体BP + 3000

このブレイヴがスピリット状態の間、自分のスピリット全てに”

【重装甲・赤】このスピリットは相手の赤のスピリットノブレイヴノネクサスノマジックの効果を受けない。”

という効果を与える。

【合体時】『このスピリットのブロック時』

バトルしている相手のスピリット一体のシンボル一つにつき、このスピリットのBPを+5000する。

【獅機龍神ストライクヴルム・レオ】BP 12000

+ 【ホーク・ブレイカー】BP 3000

+ 【ブロック時効果】BP + 20000

合計BP 35000 シンボル 1

獅機龍神の口から放たれた砲撃を光龍騎神は剣で切り伏せながら突進した。自身に向けられた刃を噛み砕んと必死に剣に喰らいつく獅機龍神、そしてそれを力で捻じ伏せようとする光龍騎神。両者はまさしく互格の戦いを繰り広げていた。

完璧な勝利とは言えないが、弾は勝ちを確信していた。このターンでバローネのキースピリットを破壊出来れば、もうバローネを守るスピリットはいない。

そこに回復状態の合体スピリットでとどめを刺せばバローネのライフは0。それで全てに決着がつく。

獅機龍神は地面に叩きつけられると、シャイン・ブレイザーのパーティにより身動きを封じられた。そのまま光龍騎神は大きく飛翔し、剣《つるぎ》を弓に変形させそのまま獅機龍神に狙い撃つ。

何千度にも達した地獄の業火を纏いし矢は獅機龍神を一発で貫いた。

バトルフィールドの地面には亀裂が入り赤黒い景色に辺りが包まれていく。

「BPがあと1000足りなかったな、バローネ。俺の勝ちだ、シャイン・ブレイザーの効果発動！ ライフを1つリザーブへ！」

しかしバローネのライフはいつまでたっても減らされることはなかった。

「なっ、何故シャイン・ブレイザーの効果が発動しないんだ!? 確かに獅機龍神は破壊したはず」

「それは早計だな馬神弾《ばしんだん》。フラッシュユタイミング！ マジック【マジックブースト】を使用する。合体スピリット一体を回

復させ、更にBPを+20000」

【マジックブースト】

フラッシュ・自分の合体スピリット一体を回復させ、このターンの間そのスピリットのBPを+20000する。

【獅機龍神ストライクヴルム・レオ】 BP12000

+ 【ホーク・ブレイカー】 BP3000

+ 【ブロック時効果】 BP+15000+5000

+ 【マジックブースト】 BP+20000

合計BP37000 シンボル1

この時

運命が大きく動く。

本来ならばここでバローネは【マジックブースト】を持っていなかった。それが神のいたずらだったのかはたまた偶然だったのかわからない。

しかし、この先に課せられる使命は弾ではなくバローネに変わってしまった事實は揺るぎなかった。

「なっ………」ここでまたBPを上げてきただと！

爆炎の中から現れた獅機龍神。ホーク・ブレイカーの翼を借り光龍騎神の喉へ喰らいつく。

不意を突かれた光龍騎神は地面にまで振り落とされ、ついに

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

バトルフィールドを巻きこみ、こなごなに破壊された。

「サジットアポロドラゴン……」

信じられないといった様子で目を見開く弾。

この時点で弾のフィールドには回復状態の【輝竜シャイン・ブレイザー】と【トレスベルーガ】。

バローネのフィールドには【マジックブースト】で回復した獅機龍神1体だけだ。

もしバローネのライフが残り1だったら総アタックで勝てただろう。しかし今のバローネのライフは2つ。

総アタックしてもバローネのライフを1残してしまうのだ。

「ターン……エンドだ」

弾は悔しそうにターンエンド宣言をした。

「悪いな馬神弾、このバトル勝たせてもらっぞ」

「バローネ……」

ドローステップまで終えたバローネは何も召還せずにそのままアタックスデップに突入する。

「【獅機龍神ストライクヴルムレオ】でアタック！ フラッシュタイミング、マジック【クレッサセントハウリング】を使用。【輝竜シャイン・ブレイザー】を手札へ、更に名称「ストライク」を持つスピリットが自分のフィールドにいるので【トレスベルーガ】も手札だ」

【クレッサセントハウリング】

フラッシュ：相手のスピリット一体を手札に戻す。その後カード名に「ストライク」と入ってる自分のスピリットがいる時、相手のスピリット一体を手札に戻す。

誇り高き獅子の咆哮がシャイン・ブレイザーとトレスベルガを吹き飛ばし、手札に戻させる。

「これでお前を守るスピリットは何もない……終わりだ馬神弾」

「ここまでか……さあ来い！ ライフで受けるッ!!」

馬神弾は両手を広げ、全てを受け入れるかの様に眼前の獅機龍神を見つめる。獅機龍神は弾に飛び掛かり、白きバリアをこなごなに喰い破った。

「ぐああああッ……」

バリアの破片と共に弾は2、3歩退けぞる。

「終わった……いや、これからが本番か」

バローネはそんな弾を少しだけ見つめるところこう言い放った。

「太古の神々よ……引き金は俺が引く」

それが合図だったかの様に弾とバローネのデッキから12宮×レアのカードが次々と飛び出していく。そのカードは12個のシンボルとなり天へと昇っていった。

天にはそれぞれのシンボルから星座を形どった紋様が浮かびあがり大きな円を描く。

「これが神々の砲台……」

その円の中から現れた黒光りする大きな砲台。弾はそれを呆気に取られながら見ていた。

バローネは何かの音が聞こえているかの様に頷く。

「ああ、わかった」

「どうしたんだバローネ？」

突如としてバローネのコアブリットが虹色の光に包まれる。

「馬神弾……どうやら引き金は引くものではなく、俺そのものだったらしい」

「お前が引き金だと？」

「そうだ」

端的に言葉を返すとバローネのコアブリットを包む光は更に強くなりバローネ自身も覆おうとしていた。

『そんな！ フローラは嫌です!! バローネ様帰ってきて下さい!』

『バローネ様、行かねえで下せえ!』

無線を通じてフローラとイオラスの泣きじゃくる声が聞こえてくる。

「イオラス、俺の頼んだ事覚えているか？」

「確か……墓を作ってくれ、でしたっけ」

「そうだ、その約束ちゃんと守ってくれよ……」

それだけ言うとバローネは無線を切る。もう彼らに言葉は必要なかった。

馬神弾はゆっくりと手を差し延べてこう言う。

「ありがとうございました。いいバトルでした」

「……なんだそれは？」

「これが俺達の時代での挨拶なんだ。本当に良いバトルだった時はこう言うって握手するんだよ」

「そうか……良いバトルだった。またいつかお前と戦いたいものだ」

バローネも手を差し延べる。お互いの距離はかなり離れているが、それでも本当に握手をしているかの様だった。

直後。

ゴオオオオオオ!!! という音が聞こえると共にバローネの視界は真っ白に染まった。

1 c o r e 蘇りし月光！ 月光龍ストライク  
ジークヴルム

目が覚めるとそこはどこにでもある普通のマンションの中だった。

「じっは……どっだ？」

ベッドからゆっくりと身体を起こすバローネ。別段身体に痛みは感じなかったが、どこかいつもとは違う違和感を感じる。

すぐ隣りに設置されてある鏡に顔を向けるとバローネはそこで驚愕した。

「俺の耳が……尻尾が……！」

自分の姿が今までとまるっきり違つという訳ではないが、魔族の特徴とも言える尖った耳と尻尾がなくなっていた。

これではまるで人間そのものである。

バローネは初めて魔族が人間と同一であることを知らされた時に大きなショックを受けた。

だが今回はそれ以上のショックを受けている。

「あら、起きたかしら」

鏡を見つめるバローネの後ろで女の声が聞こえた。振り向いてみると胸まである金色の髪を携えた女性がこちらを見つめながらニコニコと笑顔を振り撒いている。

「貴様……人間か？」



「二つ目の質問が人間か、って失礼しちゃうわね。私が動物に見える？ 正真正銘の人間よ」

「そうか、すまなかった。そうだ……それより地球は、地球リセットはどうなった？」

「地球リセット……？ 何かの映画の名前？」

バローネはそこで言葉が出なくなる。あれだけ魔族と人間の間に大騒ぎされていた地球リセットを知らない者がいる訳がない。もしバローネの予想が正しければここは

「あ、ちょっと！ いきなりベランダに行っでどうしたの？」

ガラリと窓を開く。するとバローネの目に映った景色は今までの世界とはまったくの別物だった。

バローネはしばらくその景色を眺め、何かを納得したかの様に笑う。

(なるほど……俺は引き金としての任を終えた後、この世界に飛ばされたという訳か)

ベルトに取りつけられたデッキケースに手をあてると、40枚のカードが入ってる重みはなかった。それもそのはず、馬神弾との戦いの後、バローネはそのまま引き金として消えた、使用したデッキを回収などしてなかったのだ。

しかし、デッキケースの中身は完璧に空ではない。何故か2枚のカードがその中に入っていた。

バローネはその2枚のカードを手に持ち、まじまじと見つめる。

「我が友、達よ……俺についてきてくれたのか……」

【月光龍ストライク・ジークヴルム】と【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム】。

バローネと数々の死闘を乗り越えてきた頼れる友だった。

「あら、それってデッキケース？　もしかして貴方も、バトルスピリッツ<sup>TM</sup>やっってるの？」

追いかけてきた女性はバローネのデッキケースを見つけるとなにやら嬉しそうな面持ちで尋ねてくる。

「フッ、だとしたら……？」

「私のペンタンデッキの性能を試してみたいんだけど、バトルしてくれない？」

いきなり出会った人物にバトルを申し込んでくるのだから、この世界の住民はどれも警戒が足りない。バローネはそう思った。

「一つ尋ねよう。俺を助けたのは貴様か？」

「ええ、そうよ。すぐ近くの道端で倒れた貴方を私がここまで運んできたの」

「なるほど……」

借りは必ず返すのが魔族としての、バローネとしての誇り。ならば答えは一つだった。

「いいだろう、」の月光のバローネがお前の相手をしてやる」

「ありがとう、バローネって言うのね貴方。私は如月《きさらぎ》ミカ、ミカでいいわ」

「フッ、ならばミカとやら。俺にデッキを貸して欲しい。今手持ちのカードはこの2枚しかないのぞな」

「あら×レア……でも確かにその2枚だけじゃ戦えないわよね。白のデッキでいいならすぐに持ってくるわ」

「感謝する」

しばらくしてミカはデッキを1つ持ってきた。バローネは手渡されたデッキをザッとみると

「これは酷いデッキだな」

特に遠慮もなく毒づく。それもそのはず、ミカの持ってきたデッキはデッキとして成り立っているかも危うい紙束だったのだから。

「あら〜ごめんね。私白のデッキの使い手じゃないから上手く作れなくて……」

(……というのは嘘で、本当はペンタンデッキで勝ちたいが為に、わざと適当なデッキを渡したただけぞね)

「そうか、ならば仕方ない。始めるとするか」

バローネはミカから渡されたデッキに【月光龍ストライク・ジークヴルム】と【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム】を組みこむ。これで多少のパワー不足は補えるが、まだまだ安心出来たものではな

い。

「うん。じゃあ、その机に座って」

ミカが指し示す机には、向かい合ったバトスピのプレイシートと、コアがギッシリと入ってるボイドケースがある。

（随分とアナログだな……）

バローネは元の世界では殆どバトルフィールドで戦ってきて、この様な形で戦う事はそうそう無かった。

「じゃあ始めるね。私の先攻でいい？」

席につくと、ミカが話し掛けてきた。

構わない、と言葉を返しながらバローネはライフとリザーブにコアを並べてく。

（この俺をバトルで満足させられるのは奴ぐらいだが……このハンデならどうなるかわからないな……）

【第1ターン】

「じゃあいきまーす。スタートステップ！」

ミカはドローステップまで終わると、メインステップに入る。

【クダギツネン】をレベル2で召喚。ターンエンドよ

「ミカLife」5

「手札」4

「コア」リザーブ 2 フィールド 2 トラッシュ 0  
「スピリット」【クダギツネン】

【第2ターン】

「……酷い手札だな」

ドローステップでバローネが引いたカードは【アタックシフト】。  
「コスト7という非常に重いカードで序盤には役には立ちそうにない。」

「エンドステップだ」

「バローネLife」5

「手札」5

「コア」リザーブ 5 フィールド 0 トラッシュ 0

「スピリット」

【第3ターン】

「どうしたの？ まさか手札事故？」

「さあな……」

ミカはドローステップを終え、メインステップに入る。

「手札事故をおこしてるからって容赦はしないわよ、私はこのペンタ  
ンデッキで勝率3割を目指すんだから〜」

(誰の構築でこんな事になったと……)

「メインステップ！ 【僧侶ペンタン】と【森の妖精ペンタン】をそれ  
ぞれレベル1で召還」

1 「コア」リザーブ 3 0 フィールド 2 4 トラッシュ 0

フィールドには【クダギツネ】【僧侶ペンタン】【森の妖精ペンタン】の3体のステップが並ぶ。

「3体全てでアタックするわー!」

バローネはこのアタックを全てライフで受けた。

「バローネLife」5 2

「コア」リザーブ 5 8

バローネはライフに置かれたコアを一つ一つリザーブに移動させていく。そこで感じたのは何かしらの空虚感。

「ライフで受けても衝撃がないのはもの足りないものだな……」

「ん、何か言った?」

「いや、なんでもない。続ける」

「ターンエンドよ」

「ミカLife」5

「手札」3

「コア」リザーブ 0 フィールド 4 トラッシュ 1

「スピリット」【クダギツネ】【僧侶ペンタン】【森の妖精ペンタン】

【第4ターン】

「ドローステップ……」

バローネは引いた手札を見た。

「……！」

引いたカードは【月光龍ストライク・ジークヴルム】。

かつてのライバルが言った言葉、『カードが持ち主の思いに応えてくれる』とはあながち間違っていないかもしれないとバローネは少し笑った。

「メインステップ。蒼白なる月よ闇を照らす牙となれ！ 我が友、ストライクジーク・ヴルムの声を聞け！」

「手札」 6 5

「コア」リザーブ 9 0 フィールド 0 3 トラッシュ 0 6

「うーん、これはやっぱりないのが来ちゃったかな？」

バローネは【月光龍ストライク・ジークヴルム】にコアを3つ乗せレベル2で召喚した。バトルフィールドではないのでスピリットは現れないが、ストライクジークヴルムの声が聞こえてくる様な感じがした。『任せろ』と。

「アタックステップ！ 行け我が友よ！」

「ライフで受けるわ」

「ミカLife」 5 4

「コア」リザーブ 0 1

バローネはそのままアタックステップを終了し、ターンエンドをした。

「バローネLife」2

「手札」5

「コア」リザーブ 0 フィールド 3 トラッシュ 6

「スピリット」【月光龍ストライク・ジークヴルム】

【第5ターン】

ミカは【クタギツネン】をもう一体レベル2で召喚すると

「ターンエンドよ」

何もせずにターンを終わらせる。

「動きはなしか」

「ええ、だって貴方のストライクジークヴルムに私のペンタンが無駄に散らされるのは嫌だからね」

バローネのフィールドには疲労状態の月光龍が1体。対するミカのフィールドにはペンタンを始めとする計4体のスピリットがいた。バローネのライフは残り2、普通に考えれば総アタックでお釣りがでるくらいだ。

しかしミカがアタックしない理由は月光龍の効果にあった。

「ふっ………どうやら、我が友」の効果を知っての行動か。懸命な判断だ」



「ミカLife」4

「手札」3

「コア」リザーブ 0 フィールド 6 トラッシュ 0

「スピリット」【クダギツネ】【僧侶ペンタン】【森の妖精ペンタン】  
クダギツネ

【第6ターン】

「メインステップ、【月光龍ストライク・ジークヴルム】をLv3にアック  
プ。更にネクサス【月光集める塔】を配置」

【月光集める塔】 3 / 1

0 Lv1 自分の手札は相手のスピリットノブレイヴノマジック  
の効果を受けない。

2 Lv2 【装甲】を持つ自分のスピリットすべては、その【装甲】  
と同じ色のブレイヴの効果を受けない。

2 「コア」リザーブ 7 4 フィールド 3 4 トラッシュ 0

「そしてブレイヴ【フェンリルキャノンType B】を月光龍に直接  
ブレイヴ  
合体！」

【フェンリルキャノンType B】 4 / 白1 / 緑1

1 B P 3 0 0 0

【合体時】 B P + 3 0 0 0

【装甲・赤ノ紫】このスピリットは相手の赤ノ紫のスピリットノマジック

クノネクサスの効果を受けない。

「コア」リザーブ 4 1 フィールド 4 トラッシュ 2 5

「アタックステップ、合体スピリットでアタック！」

「これもライフで受けるわ」

フェンリルキャノンと合体したことで月光龍のシンボルは+1されていたのでミカはライフを2つ失った。

「ミカLife」4 2

「コア」リザーブ 0 2

ミカはライフのコアを2つリザーブにおくと

「あら、ライフが同じになっちゃったわね、でもこれ以上アタック出来るスピリットはいないしターンエンドかしら？」

どこか悪戯な表情を浮かべながら尋ねてくる。それにバローネは黙って頷いた。

「バローネLife」2

「手札」5

「コア」リザーブ 1 フィールド 4 トラッシュ 5

「スピリット」【月光龍ストライク・ジークヴルム + フェンリルキャノンType B】

「ネクサス」【月光集める塔】

【第7ターン】

「コア、ドロー、リフレッシュ。そして続くメインステップ。【ネコマード】をLv1で召喚〜」

【ネコマード】 3 / 1

1 Lv1BP2000

2 Lv2BP3000

Lv1・Lv2『このスピリットの召喚時』

自分の手札1枚を破棄することで、自分はデッキから1枚ドローする。

「という訳で、【ヒナペンタン】を破棄。デッキから1枚ドローするわ」

ミカはデッキからカードを引くと、ニヤリという効果音が聞こえてきそつな笑みを浮かべた。

「悪いけど、このターンで決めさせて貰うわね」

「ほづ……それは楽しみだな」

ミカはコストを払って手札からカードを1枚をフィールドに出す。しかし、それはスピリットカードではなく別のカード。

そう、メインでのマジックカードの使用だった。

「マジック【メロディアスハープ】を使用、不足コストは2体の【クタギツネン】から確保。よって、両方共Lv1にダウンね。それで……対称はモチロン貴方のお友達よ」

「そつきたか……！」

【メロディアスハーブ】 3 / 1

フラッシュ・このターンの間、スピリット1体は効果を全て失い、新たに得ることもない。そのスピリットは効果の記述を持たないスピリットとして扱う。

この効果で月光龍はとても大事な効果を失った。それは『相手がアタックしてきた時、このスピリットは回復する』という効果。

これがあったお蔭でバローネはブロッカーを残さずアタックでき、ミカにアタックを躊躇へため『わせることができた。

それがなくなったということは

「もう貴方のライフを守るスピリットはいないわ！ 【クタギツネン】でアタック！」

バローネのライフは現在2。この【クタギツネン】のアタックを防いだとして、あとにはまだ4体のアタッカーが残されている。

このターンでバローネの負けは決定した。

訳でもなかった。

「フラッシュタイムिंगー マジック【ブリザードウォール】を使用。不足コストは合体スピリットから確保する」

5 「バローネコア」リザーブ 1 0 フィールド 4 3 トラッシュ  
7

【ブリザードウォール】 5 / 3

フラッシュユ…このターンの間ブロックされなかった相手のスピリットから自分のライフは1までしか減らされない。

「これで貴様のスピリットのアタックはこれ以上無駄だ。ライフで受ける…」

「バローネLife」2 1

「コア」リザーブ 0 1

「く、悔しい〜!! あともう少しだったのに〜!! もういい、エン  
ド」

「ミカLife」2

「手札」2

「コア」リザーブ 0 フィールド 5 トラッシュ 4

「スピリット」【クダギツネン】【僧侶ペンタン】【森の妖精ペンタン】

【クダギツネン】【ネコマーダ】

【第8ターン】

メインステップに入り、バローネは手札から【アタックシフト】を使用した。

「手札」5 4

「コア」リザーブ 9 5 フィールド 3 トラッシュ 0 4

「ではいくぞ。アタックステップ、合体スピリットでアタック！」

「うっ、」【ネコマーダ】でブロッカー！」

「マジック」【リポートコード】を使う。合体スピリットは回復する

「手札」4 3

「コア」リザーブ 5 3 フィールド 3 トラッシュ 0 6

【リブートモード】3 / 1

フラッシュ・自分のスピリット全てを回復させる。この効果で回復したスピリットは、合体スピリットでなくてはアタックできない。

【ネコマータ】のBPは2000、対してバローネの合体スピリットのBPは11000。勝敗はわかりきっていた。

「ネコマータ」は破壊。よって“我が友”の効果が発揮される」

LV2・LV3『このスピリットのブロック時』

BPを比べ相手のスピリットだけを破壊した時、破壊したスピリットより下のBPのスピリット全てを手札に戻す。

「あー、それ思いつ切り」このスピリットのブロック時『って書かれてるわよ？ 使えないんじゃないかしら？』

「愚問だな……何の為に【アタックシフト】を使ったと思っている？」

「あっ」

【アタックシフト】7 / 3

メイン…このターンの間、自分のスピリットすべてが持つ『ブロック時』の効果は『アタック時』に発揮される。

「よってBPP2000の【ネコマダ】よりもBPPが低い【クタギツネン】【森の妖精ペンタン】はすべて手札だ」

レベル1のBPPがそれぞれ1000の為、【クタギツネン】【森の妖精ペンタン】は手札に戻されてしまった。

ミカのフィールドにはもう【僧侶ペンタン】しかいなくなる。バローネは追い討ちをかける様に【リブートコード】の効果で回復した合体スピリットで再度アタックする。

ダブルシンボルであるせいでライフで受ける訳にもいかず、ミカのとれる行動はただ1つだけだった。

「【僧侶ペンタン】でブロックするわ……！」

「ならばフラッシュタイミング。マジック、【ダイヤモンドストライク】を使用する」

「コア」リザーブ 3 2 フィールド 3 トラッシュ 6 7

「また白の回復系マジック!?」

【ダイヤモンドストライク】 3 / 2

フラッシュ・【系統・武装】を持つ自分のスピリット1体を回復させる。

バローネのストライクジークヴルムは【系統・武装】であるため、このマジックのサポートの対称となれた。ミカの最後の守り人……いや守りペンタンもストライクジークヴルム破壊され、ついにミカのフィールドには何もいなくなった。

「これで終わりだ」

バローネは【ダイヤモンドストライク】の効果で回復した合体スピリットをアタックさせた。

「ライフで……受けるわ……」

フィールドにブロッカーがない状態では、ミカにはライフで受けるしかない。

最後にダブルシンボルの合体スピリットがミカのライフを削り取っていった。

「ミカLife」20

「あ〜〜負けちゃった〜」

「当然といった所だな」

余裕の表情を見せるバローネだったが、実際はかなり危なかった。なにしろスピリットが全然引けてなかったので、あのターンに月光龍を呼び出せていなかったらあっさりと負けていただろう。

(それにしてもこのデッキ、マジックの割合が大きい……事故をおこして当然だな)

などと考えるバローネに

「本当に貴方強いよね！ 私のデッキに寄せ集め……ゴホン。白のデッキで勝てちゃうんだから」



「世辞はいい、」のデッキは返すぞ」

バローネは自分のカードを抜き取ると、ミカにそのデッキを差し出した。

が、ミカはそれを受け取らずに「」と言った。

「ねえねえ、そのデッキはあげるから……」

私の元で働かない？ と。

2core 八チマキ少年との出会い。唸れ！  
英雄龍ロード・ドラゴン！《前編》

日曜の朝、バローネは今日も仕事場に向かって歩いていった。仕事場というのはミカが経営するバトルスピリッツ専門のカードショップで、働き始めて今日で3日目だ。オーナーであるミカは昔はかなり腕のたつカードバトラーだったらしい。

仕事の内容は在庫の管理や、レジ打ち。バローネはものわかりがいいのか、初日でこれらの仕事をアッサリとこなしていった。

「いつ平穏な世界も悪くないものだな……」

バローネがこの世界で驚いたことは多々あるが、やはりは12宮Xレアのことが一番大きい。前の世界では世界中にそれぞれ1枚しか存在しなかったカードが、この世界では普通に販売されているのだ。

バローネも月光龍が映っているパックをいくつか買って【巨蟹武神キャンサード】を当てた。

そんな訳で、前回ミカから貰った寄せ集めのデッキと、新しく手に入れたカードで、新しくデッキを構築し直したのだ。

そんな風にここ最近の事を振り返ってる途中

「待て〜、ロードトリプル〜ン！！」

バローネの前方から赤い鉢巻を巻いた少年が駆けてくる。

(なんだ……?)

パタン、とバローネの額に風に飛ばされてきたカードがあたった。

見てみるとそのカードは

「【英雄龍ロード・ドラゴン】……？ それに【バースト】だと……？」

バローネが目を引きかれたのは、【バースト】の文字。数々のカードを知りつくしているバローネだがこんな効果を持ったカードを見たのは初めてだった。

「あ、そのお兄さん。それ俺のカード！」

いつの間にかすぐ目の前に来ていたハチマキ少年は【英雄龍ロード・ドラゴン】のカードを指刺す。

「フツ……大切なカードならしっかり管理することだな」

バローネはハチマキ少年にカードを返すと、そのまま少年の元を立ち去る。

「お兄さん、サンキューなー」

バローネは振り返らずそのままミカの待つカードショップへ向かった。

くバトスピショップ

「あ、バローネ。もう15分も遅刻よ。なにやってたの？」

「少し道草をくっていた、悪かったな」

バローネは端的に言葉を返しカウンターへと向かう。

「で、今日は何をするんだ？」

「ええと、4日前から売り切れてた【霸王編】第1弾と2弾が今日届いたから補充しといて、パックとタワー両方ね〜」

ミカが指し示す方向にはずっしりと積み上げられた段ボール箱があった。その中にあるのが全部霸王編だというなら流石に入荷し過ぎではないだろうか。

やれやれ、と溜め息をつきながら段ボールの中にあるボックスを取り出す。そこにはまた見たこともないスピリットが映っていた。

「このスピリット……どこか【龍皇ジーク・フリード】の面影があるな……」

一通り補充を終えると、もう午前11時を回っていた。今日は休日なので、この時間帯が1番子供の客が集中する。

「ちょっと早いけど休憩にしましょ〜」

店の奥からミカの声が聞こえてくる。どうやら本番に向けて体力を温存しとこうという算段らしい。

バローネはバトスピタワーを2回回して、ミカの元へと向かった。

「お昼何にするっ？ とりあえず牛丼とサンドウィッチがあるけど」

休憩所のテーブルには、いかにもコンビニで買ってきた安物の牛丼とサンドウィッチが並べてある。何故この2択なのだろうかと疑問に思いつつもバローネはサンドウィッチの方を取った。

「油っこいものは嫌いだ。俺はこれでいい」

「じゃあ私が牛丼もらうわね〜」

バローネはすぐにはサンドウィッチに手をつけず、先程買ったカードを確認し始めた。

「あら、タワー回したの……って、また【星座編】第1弾と第3弾……。ほんとストライクが好きなのね、バローネ」

「友の勇姿には自然と手が伸びるものだ」

「そういうものなの？　せつかくなんだから最新の【霸王編】を買えばいいのよ……」

まず【星座編】第1弾の方を確認した。前の方から一枚ずつ見ていく、タワーの場合4枚目のカードがレア枠であり、バローネが引いたのは……

「【騎士妖蛇ペン・ドラゴン】か……」

「へえー結構レアなブレイヴじゃない。シングルだと2000円ぐらいするわよ、それ」

次に【星座編】第3弾の方を確認すると

「特にめぼしいものはないか……」

レア枠にはアンコモンしかなく光物はなかった。それでもあえていえば、かつて使っていた【光の聖剣】ぐらいだろうか。

「あら、残念だったわね」

「フツ……この程度が一番良い。前は欲しい物はなんでも手に入れられてしまって、つまらなかつたからな」

軽く食事を済ませ、バローネとミカは再びカウンターへと戻る。

すると二人の目に映つたのは、バトルスペース用のテーブルに所狭しと座る子供達。

もちろん手にはバトスピのカードが握られている。

「俺は何をすればいい？」

「ん……と、レジは私一人で十分だし……あ！ そうだ！」

ミカは何かひらめいたかの様に手の平にゲンコツをポンと置くと

「はあ……い、みんな……注目!!」

店全体に響きわたる大声で子供達に呼び掛ける。

「新しくバイトに入ったこのお兄さんとバトルしたい人、手挙げ  
てー!!」

それを聞いた子供達はざわざわと騒ぎだす。

（おい、何のつもりだ……？）

（決ってるでしょ、子供達との親睦を深めるのよ。そしたら集客率もアップして人気者になれるわよ）

誰もそんなことは望んではないのだが、と言い返しておこうかと思っただがバローネは思いとどまった。

確かに子供達の人気者などには微塵も興味はないが、久々にミカ以外の者とも戦いたいという気持ちはあったからだ。

「自分こそと思う者は名乗りを挙げろ、言っておくが俺は手加減はしない」

バローネもようやく乗り気になったのか大きく声をあげる。

すると、さっきまでざわざわしてた者達が一転、バローネに即発されたかの様に一斉に手を挙げ始めた。

「ふふ、掴みはオツケーて感じね」

嬉しそうに横で笑うミカ。そんな中バローネは一人の少年に目がいく。赤いハチマキの少年。

そう、今朝会った少年だった。

「では指命しよう、その少年、こちらにでてこい」

「えっ!? 俺? ヨッシャー! 今日についてるぜ!!」

ノリノリで向かってくる少年にバローネは名前を尋ねる。すると少年は元気そうに答えた。

「俺は陽昇《ひのぼり》ハジメ! お兄さんの名前は?」

「俺か……俺はバローネだ」

「おっしゃ、じゃあよろしく! バローネさん」

そんな様子を見ていたミカは口を挟む。

「じゃあ、対戦相手が決ったみたいね、せっかくだし、アレ”でやる”？」

「おお姐御！ “アレ”でやるのか!? さらにテンション上がるぜえー!!」

“アレ”とはなんなのか、そんな質問をする前にバローネはミカに大型の液晶モニターの前に押し込まれた。

「二人共、掛け声はいつものね〜」

「おっしや、まかすとけー」

最初は戸惑っていたバローネだが、ようやく何をすればいいのか理解できてきた。そう、バトルの前の掛け声といたらあれしかない。

「ゲートオープン解放!!」

特殊な空間を通ると、いつの間にか姿がバトルフォームになっていた。しかしそれはこの世界ではなくバローネがいつも使っていたものである。

「あれ、バローネさんだけバトルフォームじゃない? なんでだ?」

バトルフィールドの向かい側にいるハジメが話し掛けてくる。

「ちあな、特注とிட்டものだらっ」



そんなことよりもバローネはこの世界にもバトルフィールドが存在したことに驚いていた。

この3日間仕事の終わりにミカとバトルした時は全部机の上がフィールドだったのだ。

### 【第1ターン】

「よっしゃ、先攻！ 上げてくぜえー！！」

ハジメは【オードラン】を二体召喚した。フィールドには二つの赤のシンボルが現れたかと思うと、碎けて二体の小型の竜が召喚される。

「おおー、やっぱりスピリットが実体化するのは興奮するなー！  
ターンエンド」

「ハジメLife」5

「手札」3

「コア」リザーブ 2 フィールド 2 トラッシュ 0

「スピリット」【オードラン】【オードラン】

### 【第2ターン】

「スタートステップ」

バローネはドローステップまで終えて手札を確認すると、自分で組み直したただけあってか手札事故はおこしていなかった。

「メインステップ、【ノーザンベアード】、【ザニーガン】をそれぞれレベルーで召喚」

「コア」リザーブ 5 0 フィールド 0 2 トラッシュ 0  
3

白いシンボルが砕けて現れたものは青い線の入った白熊とエビを模した機械。

「アタックステップ、やれ、【ザニーガン】」

【ザニーガン】の背面スラスタから光が漏れた瞬間、一気にジェットを噴射してハジメの方へと突っこんでいく。

「くう、ライフで受けるー」

ハジメの眼前に白いバリアが展開し、それを【ザニーガン】が破壊する。

「ハジメLife」5 4

「ターンエンドだ」

「バローネLife」5

「手札」3

「コア」リザーブ 0 フィールド 2 トラッシュ 3

「スピリット」【ザニーガン】【ノーザンベアード】

【第3ターン】

コア、ドロー、リフレッシュステップを順々にこなしていき、ハジメはメインステップを迎えた。

「メインステップ！ バーストをセット！」

「バーストだと……？」

「あれ？ バローネさんバースト知らないの？」

するとハジメはバーストについて自慢気に説明してきた。

ハジメの説明からわかったことはバーストとは、フィールドに一枚だけ裏側にセットでき、特定の条件を満たすことで発動できるカードのことらしい。

「なるほど、そんなカードがあったとはな。……面白い、かかってこい」

「言われなくても……ッ 【ワン・ケンゴウ】を召喚！ そしてそのままアタックステップ！」

1 「コア」リザーブ 3 1 フィールド 2 3 トラッシュ 0

ハジメは【ワン・ケンゴウ】でアタックを仕掛けてきた。額に日本刀のついた犬が遠吠えをすると、バローネに向かって走ってくる。

【ワン・ケンゴウ】の効果！ 自分のフィールドにバーストがセットされている間、このスピリットはLv3として扱う。よって【激突】を持つぜー」

【ワン・ケンゴウ】 3 / 2

1 B P 2 0 0 0 0

3 B P 4 0 0 0 0

5 B P P 6 0 0 0 0

L V 1 ・ L V 2 ・ L V 3

自分のフィールドにバーストがセットされてる間、このスピリットはL V 3として扱う。

L V 2 ・ L V 3

【激突】『このスピリットのアタック時』

相手は可能ならば必ずブロックする。

「バーストのセットで能力を上げてくるカードか、どうやらバーストをメインに組んでるようだな」

「まあねー、ちなみにブレイヴは一枚もいれてないけどね」

「そうか……ならば【ノーザンベアード】でブロック！ ブロック時効果発動、ボイドからコア一つを【ノーザンベアード】の上に、よってL V 2にアップ」

【ノーザンベアード】 3 / 2

1 L V 1 B P P 3 0 0 0 0

2 L V 2 B P P 5 0 0 0 0

L V 1 ・ L V 2

『このスピリットのブロック時』

ボイドからコア一個をこのスピリット上に置く。

「コア」フィールド 2 3

「それでもBPPは【ワン・ケンゴウ】の方が上だあ！ やねっ【ワン・ケンゴウ】!!」

【ワン・ケンゴウ】は額の日本刀で【ノーザンベアード】を真っ二つに切り裂いた。

「続いて一体の【オードラン】でアタックー！」

息ピッタしに一体の【オードラン】が駆けていく。

「総アタックか、どちらもライフで受ける」

片方は口から炎を、もう一体は回転しながら体当りをしてきた。前方の赤いバリアが破壊され、バローネのバトルフォームのコア二つが光る。

同時に胸部に衝撃が走った。

「ぐあっ……っ！」

「バローネLife」5 3

「コア」リザーブ 2 4

「ターンエンド！」

「ハジメLife」4

「手札」3

「コア」リザーブ 1 フィールド 3 トリッシュュ 1

「スピリット」【オードラン】【オードラン】【ワン・ケンゴウ】

【第4ターン】

「ドローステップ」

バローネはカードを引く。

( やっかいだな……あのカードは )

今現在である【ワン・ケンゴウ】に勝てるカードを引かなければ、自分のスピリットはどんどんと【激突】されて破壊されるだろう。

引いたカードは

「メイנסステップ、【ザニガン】をレベル2にアップ。更に【ホーク・ブレイカー】を召喚する」

4 「コア」リザーブ 8 1 フィールド 1 4 トラッシュ 0

「げっ、おれの嫌いなブレイヴ……」

【ホーク・ブレイカー】 5 / 白2 緑2

1 LV1 BPP7000

0 合体BPP+3000

このブレイヴがスピリット状態の間、自分のスピリット全てに

【重装甲・赤】このスピリットは相手の赤のスピリットノブレイヴノネクサスノマジックの効果を受けない。

” という効果を与える。

【合体時】『このスピリットのブロック時』

バトルしている相手のスピリット一体のシンボル一つにつき、このスピリットのBPを+5000する。

バローネは【ホーク・ブレイカー】をスピリット状態のまま召喚した。つまり現在バローネのスピリット全てには【重装甲・赤】が付与されている。

「アタックステップ、【ザニーガン】攻撃しろ！」

【ザニーガン】の一对のキャノン砲がハジメに向けられる。

「ライフで受けるっ！」

直後、蒼白いビームがハジメのライフを撃ち抜いた。

「ハジメLife」4 3

「コア」リザーブ 1 2

「は、ははっ、キタキタキタアーー！」

いきなり笑いだしたハジメにバローネは少し引く。

(ライフで受けることに快感を感じてるのか……まるで馬神弾、いやそれ以上だな)

そんな風に思考を巡らすバローネだが、ハジメが笑うのはそれ以上の意味があった。

「ライフ減少によりバースト発動!!」

「なっ!?!」

ハジメのディスプレイの上で伏せられていたカードが弾き出され、宙をクルクルと舞う。それを素早くキャッチすると

「真っ赤な英雄《ヒーロー》爆裂召喚！ 現れよ【英雄龍ロード・ドラゴン】！！」

ハジメは高らかに英雄龍を呼ぶ。

そしてそれに応えるかのように突如として上空から巨大な桃が現れた。バトルフィールドに桃という一見シュールな光景だが、そんな感情は次に来る光景に洗い流されることとなる。

ザン！ ザン！ という二振りの刀が十字に桃を切り裂くと、中からその主が姿を現した。

稟とした顔立ちに、桃太郎をモチーフにした様な衣装を羽織る真っ赤な竜、【英雄龍ロード・ドラゴン】が……。



3core 八チマキ少年との出会い。唸れ！  
英雄龍ロード・ドラゴン！《後編》

「じいじは……」

バローネは桃から現れた竜にどこか既視感を覚えた。そう、このスピリットは今朝ハジメに返したカードだったのだ。

「『英雄』という言葉に違《たが》わない良い面構えだ。ターンエンド」

「バローネLife」3

「手札」3

「コア」リザーブ 1 フィールド 4 トラッシュ 4

「スピリット」【ザニーガン】【ホーク・ブレイカー】

【第5ターン】

「メインステップ！ 【英雄龍ロード・ドラゴン】レベル2に！ 更にバーストをセット！」

ダン！ とハジメはディスプレイに裏側のカードを伏せる。もちろんそれが何なのかにはバローネにはわからない。

「またバーストか……それで仕掛けてくるか陽昇ハジメ」

ハジメのフィールドには4体のスピリットが、対するバローネのフィールドには【ホーク・ブレイカー】と【ザニーガン】のみという、あまりに白のデッキとしては手薄な守りだ。

「膳は急げってね、アタックスステップ!!」

赤のバーストデッキによる。

破壊が始まった。

「【オードラン】でアタック!」

黒い翼をパタパタと羽ばたかせ、【オードラン】が突撃する。【オードラン】のBPPは1000。

この程度のBPPならば【ホーク・ブレイカー】とLv2の【ザニーガン】、どちらでもブロックしても返り討ちにできる。

「【ホーク・ブレイカー】でブロックする」

幼き竜と強者の風格を持つ鷹。勝敗など聞くまでもない。

上空から一気に降下してきた【ホーク・ブレイカー】はその勢いを殺さず、そのまま【オードラン】目掛けて突っ込んできた。

脳ある鷹が一瞬だけ見せる爪が幼き竜を確実に捉え、そのまま何メートルにも渡り、地面に擦りつける。

直後にフィールドの中腹あたりで小さな爆発が起こる。その爆炎の中から飛び出し高く飛翔する【ホーク・ブレイカー】。

役割を終えた鷹はそのまま主人であるバローネの元へと戻ってきた。

「次の【オードラン】でアタック!」

「【ザニーガン】でブロック」

一瞬の出来事だった。

バローネのフィールドから放たれた蒼白い一対の砲弾は、【オードラン】が動き出す隙も与えずに確実にその身体を貫く。近くで仲間を破壊されたのがよほど堪えたのか、【ワン・ケンゴー】は低く唸り声をあげた。

「貴様のスピリット2体はどちらも返り討ちときた。そのアタック、意味はあったのか？」

「あつたさ、少なくとも勝利への道を開いてくれた!!」

ハジメは【ワン・ケンゴー】のカードを傾ける。アタックの掛け声と共に大きく唸りをあげて走り出した【ワン・ケンゴー】。

その瞳は消えてった仲間を弔うためにキラキラと光る。

「ライフで受けよう」

バローネの前には赤い半透明のバリアが展開され、【ワン・ケンゴー】は角でそれを切り裂く。

赤い破片が宙を舞いながらバローネの胸部に衝撃を伝える。

「バローネLife」 3 2

「コア」リザーブ 3 4

ここまでは単純な数で押すだけの何の変哲もない作戦。次に【英雄龍ロード・ドラゴン】でアタックしたとしてもバローネのライフは1にしかできない。

普通ならば相手のターンに備えてブロッカーを残しとくのが常套手段といった所だ。

下手に総アタックをしかけたら今度は自分の方がライフを0にされる危険性がある。

しかし

【英雄龍ロード・ドラゴン】でアタック！」

少年は何も臆することなくアタックしてきた。まるで

勝利を確信しているかの様に。

「ふっ、面白い……ライフで受けよう」

翼を大きくはためかせ、上空からバローネに向けて英雄龍は炎を吐く。2・3個連続して放たれた火球がバローネのライフを削り取った。

「バローネLife」2 1

「コア」リザーブ 4 5

これでハジメのスピリットのアタック全ては終了した。もうバローネのライフを狙うものはいない。今頃英雄龍も膝をついて疲労している

はずだった《…………》。

「なっ…………」

顔をあげたバローネの目に映ったのは。

膝をつくことなく。

その場に二本の足で地を踏み締めて立っている。

真<sup>ロード</sup>つ赤<sup>ドラ</sup>な英雄<sup>ゴン</sup>だった。

「【英雄龍ロード・ドラゴン】の効果発動！ 自分のバーストを破棄する！ここでこのスピリットは回復する！」

【英雄龍ロード・ドラゴン】 6 / 3

1 LV1BP4000

3 LV2BP6000

5 LV3BP9000

「バースト：自分のライフ減少時」

このスピリットカードを召喚する。

LV2・LV3『このスピリットのバトル時』

バトル終了時、自分のフィールドにセットされてあるバースト1枚を破棄することで、このスピリットは回復する。

LV2・LV3『自分のバースト発動後』

発動したカードがコスト5以下の時、BP9000以下の相手のスピリット一体を破壊する。

ハジメが破棄したのは【霸王爆炎撃】というバースト。

英雄龍は懐に納めた鞘から静かに刀を抜く。砥ぎ澄まされた刃がバローネに向けられた。

「いけっ！ ロードトラゴン!!」

英雄龍はバローネとの距離を一気に縮めた。ブロック出来るスピリットがない時点でバローネがとれる行動は一つ。

振りかざされる日本刀の前でバローネは俯いて呟いた。

「ライフで……受ける」

バローネの残りライフは1なのでこの英雄龍のアタックをライフで受ければ全てが終わる。

向こう側でハジメが『よっしゃ！』とガッツポーズをするのが見えた。恐らくこのコンボで多くの対戦相手を倒してきたのだろう。

だが、バローネはライフで受けるしかなくてもまだ負けたつもりはなかった。

ギン！ とバローネは笑みを浮かべる。バローネがバトル中にならうというのはテンション最大に上がった時。

今まで『強さの深み』にはまっていたバローネをバトル中に笑わせることが出来たものなどそうはいない。

逆を言えばバローネを笑わせることが出来た者は、腕を認められたことにもなる。

「  
が、一その前にフラッシュタイミングでマジックを使う《……………》」

「なんだって?」

英雄龍が日本刀を振り払おうとした瞬間。辺りが急に霧に包まれる。

そして気がつくや英雄龍の一閃は完全に空を切っていた。

いや、一正確には霧の映しだされた虚像を英雄龍は切っていたのである。………。

バローネが使っていたのは【ミストカーテン】。スピリット一体を指定し、そのスピリットのアタックではライフを減らす事を不可能にさせてしまふ守備用のマジックだ。

「だあ~~~~~！　これで決まると思ったのに~~~~！」

悔しがって地団駄踏むハジメだが、真正銘これで本当に全てのスピリットのアタックが終了してしまったので、もうターンエンドするしかなかった。

「ハジメLife」3

「手札」3

「コア」リザーブ 2　フィールド 4　トランッシュ 0

「スピリット」【ワン・ケンゴ】【英雄龍ロード・ドラゴン】

## 【第6ターン】

なんとか最後のライフを守りきったバローネだが、先程のターンで【ミストカーテン】を失ったのはそれなりに痛手だった。

せめて使うのだったら最初の英雄龍のアタックの時に使えば、もう一つのライフを失わなくて済んだのだ。

「まあいい。ドローステップ」

引いたカードを見ると、バローネは少しだけ口元を歪め笑う。

役者は揃った。

「メインステップ、【ザニーガン】をレベル1にダウン。【ザニーガン】をもう一体。続けて【ガドファント】を召喚する」

「コア」リザーブ 6 8 6 フィールド 4 2 4 トラッシュ  
0

「手札」 3 1

残された最後の一枚。バローネはそれを天高く突き上げる。

「蒼白なる月よ……闇を照らす牙となれ我が友、ストライク・ジーク  
ヴルムの声を聞け」

突如としてフィールド全体が暗き闇に包まれる、それはまるで深夜  
のように暗く、冷たい空間。そんな闇を照らす一筋の光が空から現れ  
た。

その者の白さは一点の汚れも許さない誇り高き純白の白さ。身体  
を震わせ、響き渡る咆哮。！

震撼する大気のなか、現れたのは月の化身。

そう。

【月光龍ストライク・ジークヴルム】だ。

「うおおおー！！ すっげえ！ めっちゃかっけえ！！ さすがは  
Xレア!!」



「その余裕、いつまで持ち続けられるだろうな。【ホーク・ブレイカー】、【月光龍ストライク・ジークヴルム】に合体 ブレイヴ！」

【ホーク・ブレイカー】は頭部を収納すると、そのまま月光龍に合体した。背中に取り付けてある機械の翼と【ホーク・ブレイカー】の翼が交じり合い計四枚の翼を形成する。

月光龍は力を増し、いつそう力強く咆哮する。

「覚悟はいいか？ 合体アタック!!」

月光龍は足元の地面を力強く蹴り上げると4枚の翼で飛翔する。

時間にしておよそ2秒。気が付けば月光龍は疲労状態の英雄龍とワンケンゴ を押しのけ、ハジメの元にたどり着いていた。

そんな月光龍に後れを取ることなく、ハジメは一枚のカードを突き立てた。

「フラッシュタイミング!! マジック！ 【絶甲氷盾】を使用。不足コストはロードドラゴンより確保！ よってレベルは1にダウン」

ハジメのライフは容赦なく月光龍に削り取られる。

ハジメのライフは残り1となり【ガドファント】でもアタックすればライフはゼロだ。しかし前方に見えるのはハジメごと包み込む巨大な氷の盾。

これではアタックしようがない。

「この場面で防御用マジックか、随分と引きがいいのだな」

「へへ、バローネさんこそ」

手札が0でのこの状況、ここで仕留められなかったのは返しのター

ンでの敗北の可能性を強める。

だがバローネは無敵ブロッカーとなる月光龍を召喚したことはいくらか安心していた。

良く言えばキースピリットに対する信頼。悪く言えばキースピリットに対する過信と依存だ。

「バローネLife」1

「手札」0

「コア」リザーブ 0 フィールド 7 トラッシュ 3

「スピリット」【ザニーガン】【ザニーガン】【月光龍+ホーク・ブレイカー】【ガドファント】

【第7ターン】

「ドローステップ！」

ハジメは4枚の手札をじっくりと眺める。

4 core 襲い掛かる呪滅撃!? 呪の霸王力才  
ティック・セイメイ《前編》

「これまでよ、月光のバローネ！ セイメイ様でアタック！」

キマリは赤のマジック【アグレッシブレイジ】をこれでもか、と大きくかざす。

【アグレッシブレイジ】 3 (2) / 赤

フラッシュ…このターンの間、自分のスピリット1体に

”【激突】”このスピリットのアタック時”相手は可能ならば必ずブロックする”  
を与える。

呪の霸王は赤きオーラに包まれ、その速度を更に加速させながら突進する。

「く……合体スピリットでブロック」

紅の翼を纏った月光龍は、上半身が人間、下半身が蛇のような尾で構成されている毒々しいスピリット、呪の霸王を空中で受け止めると、ゼロ距離で紫電を口から放つ。

しかしそれは呪の霸王には当たらず空を切った。いや……正確には当たりはしたが手応えがない。

月光龍が捉えたものは呪の霸王が作り出した幻影だったのだ。

「我が友よ、後ろだ！」

バローネの声を聞き、月光龍は後方へと体を向けようとした。

が

まるで尾を鞭のようにしならせ、呪の霸王は月光龍を地面に叩きつける。

バトルフィールドの中心で大きく振動がおき、バローネの手元がわずかに揺れた。

たちこめる爆煙の中、姿を表したのは呪の霸王。対する月光龍はというと……

激しい咆哮をあげ、再び空に舞い上がり体制を立て直していた。

月光龍は紫色のバイザーの奥の目を光らせ、呪の霸王に突っ込んでいく。バックパックに取り付けられた砲鳳竜の二門のキャノンで牽制しつつ、両腕の爪をギリリと尖らせ

ザン!! と何かを切り裂く音が聞こえた。

空中には3つに分断された呪の霸王。しかし呪の霸王の表情は苦痛で歪むどころか口を曲げて笑っていた。

キマリの方もニヤリと笑って、

「セイメイ様の【呪滅撃】発動!」

突如としてバローネのライフの1つが紫のオーラに包まれる。

するとそのライフが砕け散って無くなる代わりに闇を連想させるかのように黒い渦から、粉々になって消滅したはずの呪の霸王が再び現れた。

「く……相手のライフと引き換えに復活するスピリットか。等価交換というものがまるで成り立ってないな」

奪われたライフのところを当てバローネは忌々しそうに呪の霸王カオティック・セイメイを見つめる。

「まだこれで終りじゃないわよ？ 再びセイメイ様でアタックするんだからッ！」

またしてもアタック。バローネのフィールドには合体スピリットしかおらず、さらに呪の霸王は【アグレッシブレイジ】の効果で【激突】を持っている。

つまり先程と同じ事を繰り返すことになるのだ。

そのまま繰り返していけば呪の霸王【呪滅撃】によってバローネのライフは0にされる。絶体絶命の中、バローネはどうしてこのようなバトルをしているのか思い返していた。

「初心者にバトルスピリッツを教えて欲しい……だと？」

「そうなのー、実は前のあなたとハジメ君のバトルを見た子達自分もやりたいって言い出してね」

ミカはそう言って一枚の紙をバローネに差し出す。そこにはこれからのスケジュールが書かれていた。

『バトスピ霸王《ヒーロー》《トレーナー》か……随分とめんどくさいものだな』

バトスピ霸王《ヒーロー》《トレーナー》。主にバトスピをやりたいが

ルールがわからないといった子を対象に開かれる講習会のようなものだ。

まず最初にルールの説明、その後に初心者同士でのバトル。それを毎週土日に午前と午後に分けてやるらしい。

「まあまあ、これでバトスピを更に盛り上げていこうという企画よ、貴方の頑張りがこの店の売り上げに直結してると言ってもいいわ」

「仕方がない……土日だけならやってやらないこともないぞ」

「そう来なくっちゃ！　じゃあ早速」

そんな時、店の前で大きな声が響き渡った。

「バローネはいるか……ッ!!」

その声は聞き覚えのない少女の声。

ミカは面白そうに笑いながら

「あらあら、この声はキマリちゃんね、バローネ、指名よ」

バローネの背中を押し、促した。

「まったく、面倒なものが次々と……」

バローネが店に出て行ってみると子供が三人。

一人は先日戦ったハジメという少年。その後ろにポニーテールの少女とその二人よりも一回り小さい少年が。

この子供たちは兄妹なのだろうかと疑問に思いつつバローネは尋ねた。

「俺を呼んだのは貴様か？ 生憎、赤の他人に呼び捨てにされるいわれはないぞ」

バローネはその中の少女を睨みつける。少女は頭何個分も離れているバローネに睨みつけられ、少女は少したじろぐが、

「あ、あなたを私の部下にしにきたのよー！」

胸を張りこれでもかと言わんばかりに言い放った。

突然意味不明なことを言われ、頭にハテナマークを浮かべるバローネにハジメが詳しいことを説明する。

「バローネさん、実はキマリが俺とバローネさんの勝負話を聞いたら自分も勝負したくなったって言い出して、こんなことになっちゃったんだけど、大丈夫ですか？」

「ふふん、ハジメが言うにはアンタ結構強いんですよ？ それなら私の世界征服の役にたつと思ってね」

「姉ちゃん姉ちゃん、この人すごく強そうだよ〜、止めといたほうがいいんじゃない？」

結局、ハジメの話の聞いてもうまく理解出来ない。なぜバトルから世界征服につながるのだろうか。

ハア、とため息を付いてバローネは考えた。

もう閉店時間ギリギリだ、これで少女とバトルしていたら明らかな時間オーバーになる。

「ふふ、何か面白そうな話してるわね。どれお姉さんにも話してみなれよ」

カウンターの奥からようやく現れたミカはさっそく話に割り込んできた。

「おお、姉御！　実はキマリが……」

ハジメはミカにバローネと同様の説明をした。

「なるほどね……面白そうだから特別にOKにしちゃう！」

「ありがとうございます。ミカさん！」

キマリはバローネとは真逆の態度でペコリと頭を下げ、店内に入っていく。それに続いてハジメともう一人の少年も一人ずつ頭を下げた。

「アイツらは兄妹かなにか？」

店内ではしゃぐ三人を見てバローネはミカにそっと尋ねる。

「いいえキマリちゃんとコウタ君は姉弟だけどハジメ君はあの二人の家で居候してるだけで血の繋がりはないわ」

そうか、とバローネは言葉を返し三人の元へ向かう。

「キマリとやら、バトルをするならさっさと終わらせるぞ」

その言葉を待っていたと言わんばかりにキマリはニツと笑い巨大なモニターの前に立った。

「いいわよ私のセイメイ様の呪滅撃でアンタを震え上がらせてあげる」



【呪滅撃】。

【呪撃】は知っているが【呪滅撃】はバローネにとって聞き覚えのない言葉だった。

(……なんにしろ、俺と我が友で蹴散らすだけだ)

「じゃあ二人共、例の掛け声よろしくねー」

「ゲートオープン界放っ……」

そんな訳でバトルが開始され今は第13ターン。

お互いにキースピリットを召喚し戦況は五分と五分に思えたが

「ほらほら、どうするの？ セイメイ様のアタックはまだ続けているのよっ……」

「合体スピリットでブロック……フラッシュタイミングで【絶甲氷盾】を使用、このバトル終了時、お前のアタックステップを終了させる」

バローネのライフは残り3。対してキマリのライフは未だに5。

バローネの方が劣勢と言えた。

襲いかかってくる呪の霸王を受け止め、破壊する月光龍。しかし破壊したと同時に【呪滅撃】の効果でバローネのライフは削られ、呪の霸王は蘇った。

「バローネLife」3 2

「コア」リザーブ 4 5

「【絶甲氷盾】を使われたせいでこれ以上のアタックは不可能か……ま、いいわターンエンド」

「キマリLife」5

「手札」4

「コア」リザーブ 3 フィールド 4 トラッシュ 3

「スピリット」【呪の霸王カオティック・セイメイ】

「バースト」???

モニターを見つめるハジメは歯ぎしりしながら呟いた。

「バローネさんかなりやばかったな……」

「そうだねあんちゃん、さっきのターン、【アグレッシブレイジ】を使って【激突】を持っていた呪の霸王は月光龍にとって相性が悪すぎたよ」

呪の霸王が持つ【呪滅撃】とは相手によって破壊された時、相手のライフのコア一つをトラッシュに送ることで回復状態でフィールドに戻ってくる恐るべき効果である。

しかしこの効果を回避するのはそこまで難しいことではなく、呪の霸王がアタックしてきた場合、呪の霸王よりBPの低いスピリットでブロックするかライフで受ければいいだけ。

「だけとお姉ちゃんはカオティック・セイメイに【激突】を与えてきたんだね」

その通り。

よって【呪滅撃】の回避方法の一つである『ライフで受ける』こと

を封じられた今、もう一つの回避方法である『呪の霸王よりB Pの低いスピリットでブロック』するしかなくなったのだ。

しかしバローネのフィールドにはB P 13000の【砲鳳竜フェニックス・キャノン】と合体《ブレイヴ》した【月光龍ストライク・ジークヴルム】のみで、呪の霸王よりもB Pの低いスピリットはいなかった。

よって呪の霸王のアタックは月光龍でブロックするしかなく、【呪滅撃】の発動を許してしまうことになった。

しかしここまでなら通常とあまり変わらない。しかし月光龍の存在により呪の霸王の無限アタックが完成してしまったのだ。

【呪滅撃】の効果で回復した呪の霸王は再びアタックを仕掛ける。この場合【激突】を持ってたとしても相手のスピリットが全て疲労していたらその効果は意味をなさず、ただライフで受ければいいだけ。

そうすれば【呪滅撃】も発動せず、呪の霸王は疲労状態でターンを終えることになった。

しかしバローネのフィールドにいたのは月光龍。

つまりは、『相手のスピリットがアタックした時、このスピリットは回復する』という効果のせいで月光龍は回復してしまう。

よって【激突】を持った呪の霸王をブロックしてまた破壊しなければいけないかったのだ。

「その後にもまた【呪滅撃】の効果でカオティック・セイメイは回復状態で場に戻り、アタックをする。回復効果を持つ月光龍はそれをブロック」

その繰り返しでバローネのライフは1つずつトラッシュに送られ、最後には0になってしまおうといったところだった。

「それでもこのターンは【絶甲氷盾】のお陰でなんとか凌ぎ切ったんだ、バローネさんはまだ負けちゃいないぜー！」

【第14ターン】

「随分と外野がうるさいな……メインステップ。ネクサス【月照らす氷結湖】をレベル2で配置」

「バローネコア」リザーブ 1 0 6 フィールド 4 5 トラッシュ 0 3

「手札」 5 4

「おお！ ネクサスカード！ 俺バトルフィールドでネクサスが出てくるの見るの初めてかも！」

「お姉ちゃんもハジメあんちゃんもデッキには入れてるけどバトルフィールドでは一回も使ったことないよね、ネクサス」

「そうなんだよなー、何故かバトルフィールドでバトルするといつも回ってこないんだよ」

バトルフィールドはまるで夜のようになり、バトルフィールドの中心が陥没したかと思うと水が吹き出し小さな湖が出来上がった。

「おおー！ あのネクサスは背後に出現じゃなくてフィールド全体に影響するのかわ！ なんかあがってきたー！」

「あんちゃん落ち着いて、戦っているのはバローネさんとお姉ちゃんだからー！」

【月照す氷結湖】 4 (2) / 白

0 Lv1 1 Lv2

LV1・LV2『自分のスタートステップ』  
相手のネクサス1つを手札に戻す。

LV2『相手のターン』

ドローステップ以外で相手がドローしたとき、自分はデッキから1枚ドローできる。

「続けて、【ガドフロント】を2体、それぞれレベル2で召喚する」

「バローネコア」リザーブ 6 0 フィールド 5 1 1 トラッシュ 3

「手札」 4 2

2つの白のシンボルが弾け、2体の黒い機械の象が出現した。

場には月光龍と2体のガドフロント、計3体のスピリットが並ぶ。

「アタックステップ、行けガドフロント！」

両者の間にある湖。その向こう側から【ガドフロント】は鼻の近くにとりつけてあるガトリングガンでキマリのライフを狙う。

「いいわ、ライフで受けてあげる！」

ズガガガガッ!! と連続した爆砕音が鳴り響く、一秒間で10発射された弾丸は全てキマリの元へ向かい展開された白いバリアを打ち破った。

「キマリLife」 5 4

「コア」 3 4

「ねえ、ハジメあんちゃん。どうしてお姉ちゃんは【ガドフアント】の  
アタックをカオティック・セイメイでブロックしなかったの？ ブ  
ロックしたら【ガドフアント】を破壊できた上にライフは減らされな  
かったよね？」

「おそらく、キマリの奴は月光龍のアタックを封じるためにカオ  
ティック・セイメイでブロックしなかったんだと思う……それともう  
ーっ」

「もうーっっ？」

「ああ、キマリの伏せているバースト、それが

キマリはまたニヤリと笑って、

「【ライフ減少】によりバースト発動！ マジック【妖華吸血爪】！」

ディスプレイから弾き出されたカードをバローネへと突きつける。

キマリの背後には妖・華・吸・血・爪と順々に文字が映し出され、そ  
れらが混じり合い爪の形を形成すると回復状態のガドフアントを切  
り裂いた。

「くっ、ここにきてバーストか……」

トラッシュに送られた3つのコアと【ガドフアント】を見て忌々し  
そうに見つめるバローネ。

「ハジメあんちゃん、今何が起きたの!! いきなりアタックしてない  
方の【ガドフアント】のコア全部がトラッシュに送られちゃった!!」

「んー、あれはキマリの使ったバーストの効果だな」

【妖華吸血爪】マジック

5(2) / 紫

【バースト：自分のライフ減少後】

自分はデッキから2枚ドローする。

その後コストを支払うことで、このカードのフラッシュ効果を発揮する。

フラッシュ：

自分の手札を好きなだけ破棄する。

その破棄したカード1枚につき、相手のスピリット1体のコア1個を相手のトラッシュに置く。

「つまりキマリはバースト発動時に2枚ドローし、更にフラッシュで自分の手札三枚を破棄して【ガドファント】のコア全てをトラッシュに送ったってこと」

「なるほどーそれでコアが0になった【ガドファント】はトラッシュに送られちゃったってわけかあ」

「キマリ手札」 4 6 3

「バローネコア」リザーブ 6 フィールド 1 1 8  
3 6 トラッシュ

「ターンエンドだ」

「バローネLife」 2

「手札」 2

「コア」リザーブ 6 フィールド 8 トラッシュ 6

「スピリット」【月光龍ストライク・ジークヴルム】【ガドファント】

「ネクサス」【月照す氷結湖】

「バースト」なし

【第15ターン】

「いっくわよー、スタートステップ！」

キマリはメインステップに【吸血令嬢エサルフリーダ】をレベル2で召喚する。

紫のシンボルが無数のコウモリに変わり、さらにそのコウモリの集団から黒いドレスを纏った黒髪ロングヘアの少女が姿を表した。

目はツリ目がちでどこか毒々しさを放つ可憐な美少女は怪しげな音色でフフ、と小さく微笑する。

【吸血令嬢エサルフリーダ】スピリット

5(2) / 紫 / 夜族

1	LV1	3000	2	LV2	5000	4	LV3	7000
---	-----	------	---	-----	------	---	-----	------

LV1・LV2・LV3『このスピリットのバトル時』

自分が使用する紫のマジックカードすべての色を無いものとして扱う。

LV2・LV3

相手のネクサスすべてのLVコストを+1する。

「まだまだよー、続けて、【シュテン・ドーガ】も召喚！ 不足コストはセイメイ様から確保するわ。 召喚時効果発動で【シキツル】をトラスシュから召喚、【シキツル】の召喚時効果で自分はデッキから一枚ドロロー！」

【シュテン・ドーガ】と呼ばれるスピリットはまるで鬼を彷彿させる面構えで、後ろでなびく茶色い頭髪を振り払うと、青白い肌がむき出しの上半身に埋め込まれた紫のシンボルから禍々しい光を放った。



瞬間、地面がボコボコと膨らみ、その中から折り紙でおられたかのような鶴が出現する。

### 【シュテン・ドーガ】スピリット

5 (2) / 紫 / 魔影

1 LV1 3000 3 LV2 5000

LV1・LV2『このスピリットの召喚時』

自分のトラッシュにある系統：「魔影」を持つ

コスト3以下のスピリットカード1枚を、コストを支払わずに召喚できる。

LV1・LV2

自分のバースト効果で、相手のスピリットから相手のリザーブ/トラッシュに置かれるコアの数を+1個する。

LV2

自分のバーストをセットしている間、

系統：「魔影」を持つスピリット1体につき、このスピリットをBP+2000する

### 【シキツル】スピリット

3 (2) / 紫 / 魔影

1 LV1 1000 3 LV2 2000

LV1・LV2『このスピリットの召喚時』

自分はデッキから1枚ドローする。

「コア」リザーブ 8 3 0 フィールド 4 6 トラッシュ 0 4 7

「各スピリットのコア数」【呪の霸王カオティック・セイメイ 2】

【吸血令嬢エサルフリーダ 2】【シュテンドーガ 1】【シキツル 1】

「すごいや、姉ちゃん！ 一気に自分のフィールドに3体のスピリッ

トを追加した！」

「キマリの奴……数で押す戦法か、だけどバローネさんのフィールドには無限ブロッカーとなる月光龍がいる、どう切り崩す……？」

バローネは【シキツル】の効果でキマリがドローしたのを確認すると

「ではこちらの【月照す氷結湖】のレベル2の効果を発動する」

『Lv2『相手のターン』』

ドローステップ以外で相手がドローしたとき、自分はデッキから1枚ドローできる。

しかしいつまでたっても【月照す氷結湖】はなんの反応も示さない。要するに効果の不発動を意味していた。

「なぜだ……確かに奴はドローしたはずだったが……」

「残念、その効果はレベル2からでしょ。今そのネクサスはレベル1。よって効果は発動しないってわけ」

「馬鹿な、確かに俺はレベルが2になるようにコアを置いた

」

その時バローネは何かに気づいたかのようにキマリのフィールドのスピリットを見る。

そのスピリットは【吸血令嬢エサルフリーダ】。

「……ネムシゴトウツウか」

ギユツとバローネはディスプレイの横のレバーを握り締める。

確かにバローネは【月照す氷結湖】をレベル2になるようコアを1つおいた。

が、しかし【吸血令嬢工サルフリーダ】の効果『相手のネクサスすべてのLvコストを+1する。』によって【月照す氷結湖】のレベル2に必要なコアは2つになってしまったのだ。

よってコアが1つしか乗ってないバローネのネクサスは実質レベル1ということになり、レベル2の効果は発揮できないのだ。

「このターンのアタックはやめておくれ、アタックステップは何もせずターンエンド」

「キマリLife」 4

「手札」 3

「コア」リザーブ 0 フィールド 6 トラッシュ 7

「スピリット」【呪の霸王カオティック・セイメイ】【吸血令嬢工サルフリーダ】【シュテンドーガ】【シキツル】

「バースト」なし

「呪の霸王がレベル3になれなくて【呪滅撃】が発動しないから姉ちゃんにはアタックして来なかったね」

「そっだな……」このターン、どう動くかによって大きく流れが変わっていくぜ、バローネさん」

Score 襲い掛かる呪滅撃!? 呪の霸王力才  
ティック・セイメイ《後編》

【第14ターン】

月光のバローネ

「Life」2

「Hand」3

「Core」Reserve 13 Field 8 Trash 0

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム+砲鳳竜フェ

ニック・キャノン】【ガドファント】

「Nexus」【月照す氷結湖】

「Burst」なし

「メインステップ。月照す氷結湖をレベル2に、そして【イグア・バ  
ギー】をレベル2で召喚」

「Hand」3 2

「Core」Reserve 13 11 Field 8 11

Trash 0

バローネのフィールドに白のシンボルが現れ、弾ける。

前方に2つ、後方に1つ。計3つのタイヤを持った緑色の蜥蜴がブ  
ンブンとエンジンを鳴らした。

「アタックステップ、【月光龍ストライク・ジークヴルム】でアタック  
！【砲鳳竜フェニック・キャノン】の合体アタック時効果発動、【激  
突】だ……！」

【砲鳳竜フェニックス・キャノン】

5 (赤2白2) / 赤 / 機竜・星魂

1 Lv1 3000 0 合体+3000

Lv1『このブレイヴの召喚時』

BP4000以下の相手のスピリット2体を破壊する。

または、BP4000以下の相手のスピリット1体と相手のネクサス1つを破壊する。

合体条件：コスト3以上

【合体時】【激突】『このスピリットの合体アタック時』

相手は可能ならば必ずブロックする。

「ふふん、セイメイ様がレベル1の時にアタックを仕掛けてきたわね、いいわ【シキツル】でブロックしてあげる！」

上空の月の光に照らされ、月光龍が夜の闇を切り裂きながら滑空する。

シキツルはキマリを庇うように前に現れるとそのまま月光龍に消し飛ばされた。

「なるほど！ 呪の霸王の【呪滅撃】はレベル3からの効果なのか！

だからバローネさんはストライク・ジークヴルムで躊躇なくアタックしたんだな！」

「イグア・バギー、続け！」

真ん中にポツカリと存在する氷結湖の上を水を切りながら走るイグア・バギー。

(こいつにはBPがのエサルフリーダとシュテンドーガがいるのにア

タックをしてきた……ここは迂闊にブロックしないほうが賢明かな？)

キマリはこのアタックをライフで受けた。

異キマリ

[Life] 4 3

[Core] Reserve 0 1

バローネはそれを見て不敵に笑う。まるで見事にブラフにひっかったキマリを笑うかのように。

「ふっ、ターンエンド」

月光のバローネ

[Life] 2

[Hand] 2

[Core] Reserve 1 1 Field 1 1 Trash 0

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム+砲凰竜フェニックス・キャノン】【ガドファント】【イグア・バギー】

「Nexus」【月照す氷結湖】

「Burst」なし

## 【第15ターン】

異キマリ

[Life] 3

[Hand] 4

[Core] リザーブ 1 0 フィールド 6 トリッシュ 0

「Spirit」【呪の霸王カオティック・セイメイ】  
【吸血令嬢エサルフリーダ】

「Nexus」なし

「Burst」なし

### 【メインステップ】

「呪の霸王カオティック・セイメイ」、【吸血令嬢エサルフリーダ】を  
レベル3に、【シュテンドーガ】をレベル2にアップ！そしてバース  
トセット「……」

Core Reserve 10 3 Field 6 1 3 T  
rasho  
「Burst」???

### 【アタックステップ】

バローネは勝手にアタックステップを進めようとするキマリを止  
める。

「我が友のレベル3【合体時】効果の発動だ……」【吸血令嬢エサルフ  
リーダ】を指定「

【合体時】Lv3『相手のアタックステップ』

ステップ開始時、合体していない相手のスピリット1体を指定す  
る。

そのスピリットは可能ならば必ずアタックする。

「いくわよ、【シュテンドーガ】でアタック!!」

まるでつめき声のような雄叫びを上げてシュテンドーガは氷結湖

の前まで行くと、大きく跳躍してそれを飛び越える。

そしてそのまま、まっ先にバローネの方へと手の持ったナタを投げつけた。

ガギン!! と金属同士がこすれ合う音が響く。

「我が友よ、ブロックを頼む」

それはライフを削られた音ではなく、月光龍が投げつけられたナタを強靱な牙で啜え、押さえつける音だった。

「さて、キマリとやら。貴様は吸血令嬢でもアタックをしなければならぬというのに、シュテンドーガまでもアタックさせた。狙いはなんだ?」

「今こわかるわよ」

ベキベキと口に加えたシュテンドーガのナタを砕き、粉々に粉碎する月光龍。その瞳は現在丸腰状態のシュテンドーガに向いていた。

轟!! と大きな気流が発生したかと思うと、月光龍はすでにシュテンドーガに向かって背部のスラスターを最大噴射。

わずか0.5秒でシュテンドーガの元へたどり着き、右の腕を大きく振り払って5つの爪で引き裂く。

シュテンドーガの胴体には3つの爪痕が刻まれ、そこから緑色の血が噴き出した。

ウゴオオオオオオオ!!!!

響き渡るシュテンドーガの絶叫。しかし彼は最後に力を振り絞って月光龍のボディに取り付いた。



月光龍の白銀に輝くボディに自身の拳を叩きつけるシュテンドーガ。

しかし傷は一つもつきはしない。逆にシュテンドーガの拳から血が噴きだすくらいだ。

月光龍はまるで汚物を振り払うかのように身体を大きくうねらせて上空へと飛翔する。そして

「決めろ、合体スピリット」

バローネの掛け声とともに、月光龍はシュテンドーガを振り払った。

何十メートルもの高さから落下を開始するシュテンドーガに、月光龍は背中に取り付けられた二門の砲台を向ける。

数秒後、2つの閃光がシュテンドーガの身体を貫く。シュテンドーガは真下にある氷結湖にドボンと沈み、

ドゴオオオオオ!!!!

水中で爆発し、氷結湖は大きな水しぶきを上げた。

「Core Reserve 3 6 Field 13 10 T  
rasho

「終わったな……」

「いいえまだこれからよ!!」

氷結湖の水飛沫に紛れ、月光龍に向かう一つの物体がある。漆で塗られたかのように光沢のある黒い突起物。

それはレイピア。細く、繊細に、ただ一点のみを狙って投擲された剣だった。

そして正確に月光龍に突き刺さった。

正確には、月光龍と合体していた【砲鳳竜フェニックス・キャノン】に。空中で背部のブレイヴが爆発して、月光龍は地にたたきつけられた。

「【不死】の効果でトラッシュから【闇騎士フロレンス】を召喚！

召喚時効果であんたのブレイヴは破壊させてもらったわ!!」

「なんだと……」

Core Reserve 6 5 Field 10 11 T  
rash 0 1

【闇騎士フロレンス】スピリット

3(2) / 紫 / 魔影

1 LV1 2000 2 LV2 3000

【不死・コスト4/5】『お互いのアタックステップ』

トラッシュにあるこのスピリットカードは、

コスト4/5の自分のスピリットが破壊されたとき召喚できる。

LV1・LV2『このスピリットの召喚時』

【不死】で召喚されたとき、相手の合体スピリットのブレイヴ1つを破壊する。

「キマリの奴なかなか計算高いな。まさか【シュテンドーガ】の破壊を利用してブレイヴを破壊するなんて！」

「お姉ちゃんああ見えても意外に念入りに世界征服の計画立ててるからね。」じつじつとじろではその計算高さがすごいきてるんだよ」

フェニック・キャノンを失った月光龍はヨロヨロとバローネのフィールドに戻り、腰を下ろす。

「まあいい。次は効果で指定された吸血令嬢だ。さあこい」

「仕方が無いわね【吸血令嬢エサルフリーダ】でアタック！」

吸血令嬢は勝手に動いてしまう自分の身体を必死で食い止めようとするが月光龍の強制力にはかなわずそのままバローネのフィールドに向かっていく。

つり目の瞳から零れる涙が氷結湖に落ち、静かな波紋を作っている。

しかし機械の龍に同情などという感情は存在しない。ブレイヴを失ってもなお、主に危害を加えるものを消滅させるべく月光龍は前方の吸血令嬢に照準を合わせ、咆哮とともに紫電を放った。

真正面から月光龍の攻撃を受けた吸血令嬢はゆっくりと瞳を閉じて、氷結湖に沈んでいく。シュテンドーガが落ちた同じ場所です。

「我が友のレベル2、3効果。【吸血令嬢エサルフリーダ】よりもBPの低い【闇騎士フローレンス】を手札へ」

Lv2・Lv3『このスピリットのブロック時』

BPを比べ相手のスピリットだけを破壊したとき、

そのスピリットよりBPの低い相手のスピリットすべてを手札に戻す。

ディスプレイから吹き飛ばされた【闇騎士フローレンス】のカードを空中でキャッチするとキマリはまたあのキーワードを口にする。

「【不死】の効果発動！」

再び氷結湖の中から一本の剣が飛ぶ、今度は月光龍ではなく後方にいた【ガドファント】がその餌食となった。

「Core Reserve 5 6 10 5 Field 11  
10 6 7 Trash 1 4

「Burst」 冥皇封滅呪 破棄

ズドン、ズドンと水に濡れ、甲冑に包まれた騎士が現れた。真つ黒な鎧の中、一つだけ不気味に光る赤いモノアイが剣の突き刺さったガドファントの方へと向く。

騎士はゆっくりとした足並みでガドファントに近づき、その剣が自分のものだと誇示せんとばかりに思いっきり引きぬいた。

剣を引きぬかれたガドファントは三回ほど痙攣し、そのまま消滅していった。

【闇騎士ガヴェイン】スピリット

6 (3) / 紫 / 魔影

1 LV1 3000 2 LV2 6000 6 LV3 9000

【不死：夜族】『お互いのアタックステップ』

トラッシュにあるこのスピリットカードは、

系統「夜族」を持つ自分のスピリットが破壊されたとき召喚できる。

LV1・LV2・LV3『このスピリットの召喚時』

自分のバースト1つを破棄することで、

相手のスピリットのコア3個を相手のリザーブに置く。

「またしても不死か……厄介だな」

「まだまだいくわよ！ 【呪の霸王カオティック・セイメイ】でアタック！」

呪の霸王のBPは11000。月光龍のBPはブレイヴを失ったため10000。これでブロックすればこちらが破壊されるので【呪滅撃】は発動しない。  
しかし

「ライフで受けるッ！」

月光のバローネ

「Life」2 1

「Core」Reserve 1 1 1 2

ここで月光龍を失えば敗色は濃厚となる。それに月光龍はバローネにとって自身のプライドのようなものだ、そつやすやすと破壊されるわけにはなかった。

「ライフは後1ね。ターンエンド」

「Life」3

「Hand」4

「Core」Reserve 5 Field 7 Trash 4

「Spirit」【呪の霸王カオティック・セイメイ】【闇騎士ガヴェイン】

「Nexus」なし

「Burst」なし

【第16ターン】

月光のバローネ

「Life」1

「Hand」3

「Core」Reserve 16 Field 8 Trash 0

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム】【イグア・バギー】

「Nexus」【月照す氷結湖】

「Burst」なし

【メインステップ】

「ワルキューレ・ミスト」【エゾノ・アウル】をそれぞれレベル3で召喚

「Core」Reserve 16 8 3 Field 8 13  
16 Trash 0 3 5

人魚を模した白い機械とふくろつのような機兵がバローネの場に現れる。これで4体。

総アタックをかければキマリのライフは0にできるはずだ。

【アタックステップ】

「まずは【イグア・バギー】【エゾノ・アウル】2体でアタック！」

「【エゾノ・アウル】は【闇騎士ガヴェイン】でブロック！【イグア・バギー】はライフで受ける！」

エゾノ・アウルは頭部をガヴェインにわしづかみにされ、そのまま

地面に叩きつけられ爆散した。その爆風をすり抜けイグア・バギーはキマリのライフを削り取る。

「Life」3 2

「Core」Reserve 0 1

「続けて【ワルキューレ・ミスト】でアタック」

「私のライフを0にしようたってそうはいかないわ！ フラッシュタイミング！ 【絶甲氷盾】を使用、このバトルであんたのターンは終了よー」

キマリはまたライフで受けた。

「Life」2 1

「Core」Reserve 1 2

「よく使われているな、そのマジックは」

前回はハジメに使われ、今回はキマリに使われた。かくいうバローネもデッキには入れてるのだが。

月光のバローネ

「Life」1

「Hand」2

「Core」Reserve 6 Field 13 Trash 5

「Spirit」【月光籠ストライク・ジークヴルム】【イグア・バギー】【ワルキューレ・ミスト】

「Nexus」【月照す氷結湖】

「Burst」なし

【第17ターン】

異キマリ

「Life」1

「Hand」5

「Core Reserve」15 「Field」7 「Trash」0

「Spirit」【呪の霸王カオティック・セイメイ】  
【闇騎士ガヴェイン】

「Nexus」なし

「Burst」なし

「バローネさんとキマリ。ついにライフが並んだな……これならどっちが勝つか検討もつかないぜ！」

「僕はお姉ちゃんを応援しておくよ。また頭グリグリされると嫌だし」

【メインステップ】

「【闇騎士フローレンス】をレベル2で召喚、そして【闇騎士ガヴェイン】をレベル3にアップ！」

「Hand」5 4

「Core Reserve」15 「Field」7 「14」T

「Trash」0 1

【アタックステップ】

「そろそろケリをつけようじゃない！ 【闇騎士ガヴェイン】でアタック！」



「ふん、まだまだそうは行かなさそうだぞ？」【ワルキューレ・ミスト】の効果、【闇騎士フローレンス】を疲労させる」

【ワルキューレ・ミスト】

Lv2・Lv3 『相手のアタックステップ』

相手のスピリットがアタックしたとき、相手のスピリット1体を疲労させる。

「なんの！ フラッシュタイミングで【ミヤバッド】を破棄！ そして【闇騎士ガヴェイン】のBPを+2000。合計BP11000！」

【ミヤバッド】スピリット

3 (2) / 紫/夜族

1 Lv1 2000 3 Lv2 3000

フラッシュ『お互いのアタックステップ』

手札にあるこのスピリットカードを破棄することで、このターンの間、

スピリット1体をBP+2000する。この効果はスピリットの効果として扱う。

「フッ、それで今の俺の唯一のプロッカー、ストライク・ジークヴルムを破壊して、そのあと呪の霸王のアタックで決めようというわけか。だが言っただけで、そうはいかなさそうだ《……………》と」

バローネが差し出した一枚のカード。それは神々の砲台で馬神弾が二度もバローネに使ったマジックだった。

(前回自分を苦しめたカードに、今回は助けられるとは……………何とも言えないめぐり合わせだな)

息を吸ってバローネは口を開く。

「フラッシュタイミング！ マジック、【デルタバリア】を使用する！」

バローネの眼前に展開された三角形のバリア。それはアタックを仕掛けてきたガヴェインをあっさりと弾き返した。

【デルタバリア】マジック

4(2)/白

フラッシュ…このターンの間、相手のスピリットノマジックの効果と、相手のコスト4以上の

スピリットのアタックでは、自分のライフは0にならない。

「くっ……それでコスト3のフローレンスを疲労させたわけね……！」

ターンエンドー！」

巽キマリ

「Life」1

「Hand」4

「Core Reserve」15 7 「Field」14 「Tra  
sh」1

「Spirit」【呪の霸王カオティック・セイメイ】【闇騎士ガヴェ

イン】【闇騎士フローレンス】

「Nexus」なし

「Burst」なし

【第18ターン】

月光のバローネ

「Life」1

「Hand」2

「Core」Reserve 12 Field 13 Trash  
0

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム】【イグア・バ  
ギー】【ワルキューレ・ミスト】

「Nexus」【月照す氷結湖】

「Burst」なし

【メインステップ】

「我が友よ、新たな力を身につけよ！ 【セイバーシャーク】を直接  
月光龍に合体《ブレイヴ》！」

サメを模したブレイヴが月光龍の背部に取り付くと、2本の青白い  
ソードが噴射する。

【アタックステップ】

「これでラストアタックだ。穿け、合体スピリット!!」

巨大なスクリーンの前で勝負の行方を見守るハジメとコウタは唾  
然とした。

「今の月光龍のBPは13000だよ、これじゃ呪の霸王にブロック  
されて呪滅撃が発動しちゃうよ〜」

「バローネさんどういっつもりなんだ……普通にイグア・バギーでア  
タックすれば勝てるのに……もしかしてブレイミス？」

キマリはバローネの予想外の行動に大笑いし、

「あっはっはっはっはー!! 血迷ったかバローネ！ これで私の勝

ちで決まりい！」

【呪の霸王カオティック・セイメイ】でブロック宣言をした。

これが決着だと言わんばかりに両者のキースピリットが空中で激突する。

呪の霸王の星型の式神から放たれるビームを紙一重で回避し、月光龍はセイバーシャークのソードで一閃した。

だがそれは幻影。本体はすぐ後ろにいた。

呪の霸王は後方から至近距離で攻撃を放つ。それに直撃した月光龍は墜落し、氷結湖の中へ落ちていった。

様子を伺うため、氷結湖の近くに寄る呪の霸王。

だがそれが失敗だった。

ザパア!! と水しぶきを上げ月光龍は呪の霸王に食らいついた。

突然の出来事に為す術もなく呪の霸王は湖の中へと引きずり込まれていく。

「1つ言っておいて」

「何? もしかして負け犬の遠吠えを今から言っ気かしら?」

「鮫は1度喰らいついたら最後、相手が絶命するまで離さないらしい」

氷結湖から出てきたのは月明かりに照らされ、より一層の美しさと凶暴さをあらわにした月光龍。

呪の霸王は粉々にされ、身体のパーツが氷結湖に浮かび上がってきた。

「フフフフ、呪の霸王の【呪滅撃】発動! 最後のライフを削りとりなさい!!」



ら、アンタも0になって引き分けでしょ!? そーよ、それしかない!!」

「同時に発動する効果についてはそのターンを進めているプレイヤーがどちらを先に処理するかの特権がある。よって俺は【呪滅撃】よりも先に【セイバーシャーク】の効果処理したんだ」

「そんなー……!!!」

「ふふ、今日は楽しかったわね」

閉店時間ということでシャッターを降ろしながらミカは呟いた。

「どうだか……」

バローネは夜空に映る満月を見ながら返答する。表情はすこし柔らかかった。

「キマリちゃんたら『次こそは必ず勝ってあんたを私の世界征服の仲間引き入れるっ……』て、すっごく燃えてたわの、若いっていいわね」

「……」

「どうかしたの?」

バローネはしばらく黙って、一言だけこう言った。

「ローマだけでも征服するのは大変なものだぞ」

## 6core 邂逅！ 世界チャンピオンvs月光のバローネ

「いいが、そこでのアタックは慎重に考える」

バトルスピリッツ専門店。バローネがここで働き始めて今日で半月が過ぎようとしていた。

本日は日曜、つまりは、SB《ショップバトル》の開催日だ。

「わかりました！ 【ピグミゲーター】、【ファイアファンサウル】、【タッチベット・モンキ】でアタック!!」

「慎重に考えろ、と言っただはずだぞ？ それにバトルスピリッツに同時アタックなんて存在しない、一体ずつアタックだ」

バローネは現在バトル真っ最中の少年をギリリと睨みつける。

「す、すいません……じゃあ【ピグミゲーター】でアタックします……」

少年は少し声を低めてアタックを言い直す。

もしこれが本当の試合ならば、試合中の口出しとして注意されるのはバローネの方だ。

しかしこれは実際の試合ではない、SBと同時に行われる『バトルピ霸王』《ヒーロー》『トレーナー』という、バトルピ初心者に対してヒーロートレーナーというスタッフがレクチャーするという、要はバトルピを広めるためのイベントのようなもの。

そしてバローネがヒーロートレーナーというわけだ。

「ちょっとバローネ、そんなに怖い顔で教えなくてもいいでしょ、ほー



らスマイルスマイル」

向こうのSBの会場から戻ってきたミカがバローネに注意する。

「ふん、」じつか？」

ギン！ とバローネは目を見開き、口の端を釣り上げて笑ってみせた。それはお世辞にも爽やかスマイルといったものではなく、どちらかと言うと凄みを聞かせた、脅しのような笑みだ。

「ちょ!! 怖い、怖いって!! なんでそんな笑い顔しかできないの!？」

「まったく、人間というのは一々細かいな、同じようなものだろ」

そんなこんなでミカはSBを、バローネはヒーロートレーナーの仕事を終えた。

時刻は午後の1時を回ろうとしている。

「ふー、お疲れ様バローネ。休憩にしない？」

「そうだな、その前に……」

バローネは右の手の中で百円玉をチャリチャリと鳴らし、バトスピタワーへと向かう。

回すのはもちろん星座編第1弾と第3弾。

「ホント好きねー、というか月光龍と月光神龍は、もう3枚集まったんだから、他の弾でいいんじゃない？」

「いや……霸王編とやらに俺の求めるカードはそうないのな」

まさか『我が友』とやらを無限収集するんじゃないのだろうか、そんなことを考えながらミカはあることに気づく。

「あら、今回は星座編4弾も回すのね」

いつもは星座編1弾と3弾を1回ずつ回すだけなのだが今回は【光龍騎神サジット・アポロドラゴン】が映っている、4弾も一回だけ回っていた。

「ただの気まぐれだ……」

そう言いながら、バローネは早速カードを確認する。

一枚目、【アナグマコスケ】

二枚目【ヒクイック】

三枚目【スネイクスレイヴ】

そして四枚目……

「ふふ、バローネ。あなたってホント強運の持ち主ね」

最後のカードは【光龍騎神サジット・アポロドラゴン】だった。

手の中で太陽の光と同じくらいに光り輝くそのカード。バローネにとって忘れもしないライバルが使っていたカードだ。

このカードとのめぐり合わせは、まるでバローネに何かを告げているかのようだった。

「……………」

「どっしたの固まっちゃって、もしかしてあまりの嬉しさに感動してたりして!？」

「なんでもない……唇じょうじょ」

そういつてカウンターの奥へと向かおうとした時

「ミカたーん!! お仕事頑張ってる!? 遊びに来ちゃったー!!」

大声とともに入り口から現れた男。ファッションはひと昔前のスターのような格好で、グラサンをかけ、おまけに頭と比率のあってないアフロ（おそらくツラだろっ）をかぶってる。

「確かに「この治安は警察というのが守ってるのだから、番号は110で良かったか？」

「ええ、そうよ。暴れるといけないからさっさと呼んで頂戴」

「って!! なにサラリと人を通報しようとしてんの!! 俺だよミカたん!! アフローヌだよー」

「ふふふ、冗談よ アラ……ゴフンゴフン……アフローヌ」

バローネは二人が顔見知りなのを確認して携帯を置いた。どうやらそれなりの関係らしいので、「こ」はひとまず二人だけで話させておこう。

「それで今日は何のようであつたのかしら」

「だから言ったじゃん、遊びに来た、って」

「ふうん、今日はSBの日だったんだからどうせなら出ればよかったのよ」

「ぶっちゃけた話をするよ、正直SBに出ても俺をおっ、と言わせてくれるプレイヤーはいないからねー不完全燃焼ってやつかな？」

そこでバローネの眉がピクリと動いた。

この男は何か自分と似たところがある。

強さの極みに達し、自分を負かすくらい強いプレイヤーを求め彷徨い続けていたあの時の自分に。

「ふうん、じゃあバローネと戦ってみれば？ おっ、とどころか、ギャフンと言わされるかもしれないわよ」

提案したのはミカだった。

まるでバローネの思いを読み取ったかのようにミカはバローネの方を向いてウインクをする。

「バローネって君かい？ 実はさっき見た時から少し気になってたんだよね」

「その言葉、そのまま貴様に返そう」

バローネは寄りかかっていた壁から離れ、アフロヌの方へと近づく。

「俺の名は月光のバローネ、呼び捨てで構わない」

「君になら俺の正体をバラしてもいいかな……あ、ちびっこ達には

黙っておいてくれよ」

アフロローヌは神業のごとく瞬時に服装を変え、ヅラを取り、サングラスを外した。

そこに現れたのは

「俺の名前は薬師寺アラタだ、よろしくなバローネ」

有名人といっても過言ではない、バトスピの世界チャンピオン。バローネもちょうくちよくテレビでは見かけたことがあった。

「こんなところでバトルスピリッツの頂点に会えるとはな……光栄なことだ」

「ははっ、照れるな。んじゃそろそろ始めようか」

バローネとアフロローヌ改めアラタは巨大モニターの前に立つ。

「さて、ようやくバーストに慣れてきたバローネがどこまでアラタについていけるか楽しみね」

ミカがすぐ近くの椅子に腰を掛けて、大きく手を挙げる。

「二人共準備はいい？ それじゃ、いつものコールお願いね！」

まかせろ、とバローネ。

おつよー！ とアラタ。

二人は数秒間お互いの顔を見つめ合った。

それは、改めて目の前に立つ男が、数々のバトルをくぐり抜けてき

た猛者であることを確認しているのだろう。

「ゲートオープン」

大きく息を吸い、空気とともに声を送り出す。

そして二人は4文字の言葉を強く、思いっきり強く言い放った。

「界放ッ!!」

7 Core 激突！ 龍の霸王VS月光神龍

「だっー!! 今日SBだったのすっかり忘れてたー!!」

地面を思いつきり蹴りあげて走るの一人の少年、風に揺られその少年の赤いハチマキがゆらゆらと揺れる。

少年の名は陽昇ハジメ。

如月ミカの経営するバトスピショップの常連でもありバローネとも面識がある少年だ。

「せっかくバゼルを手に入れてデッキを組み直したのに……ああもう!!」

第三弾が入荷されて、早速当たった赤のXレア【爆炎の霸王ロードドラゴン・バゼル】。

それを軸にデッキを調整するのに夢中でSBのことを忘れていたのである。

今から行っちゃって、SBはとっくに終わっているだろうが、それでもフリーバトルくらいならできないかと、僅かな希望にすがってハジメは走り続ける。

駅から降りて数十分走り続けると、ようやくいつものバトスピショップが見えてきた。

「あれ……なんであんなに人が集まってるんだ？」

ようやくついたかと思うとその店は外からも伺えるくらいに中では人が混みあい、蒸し風呂状態だった。

ハジメは人ごみを掻き分け、なんとか店内へと入る。

「おっ、テガマルじゃん！ 今日のSBどつだった？」

人だかりの最前列に、三人の少年が立っていた。彼らは『テガマル組』と呼ばれ、このショップでは一目置かれている存在だ。

「オっす、ハジメ。もちろんアニィの優勝だぜ！」

大柄な男、仁霧コブシがテガマルの代わりに答える。

「おお、やっぱすっげーな、テガマルは!! だからこんなに人が集まっているのか!？」

「いいや、違う。あれを見るハチマキ」

「こんどはキャップを目元まで深くかぶった中性的な顔立ちの少年、日下チヒロが答えた。

チヒロの指差すもの、それは大型のスクリーン。

「いまバトルやってんのか……ええと戦ってる人は……」

そこでハジメは二重に驚いた。

それは世界チャンピオンの薬師寺アラタがこんな田舎のショップで戦っていて、しかもその対戦相手がここの店員の、バローネなのだから。

「ええええええええ!! なんで!? なんで!? チャンピオンがここに!?! しかも、なんでバローネさんが戦っているの!?!」

「静かにしろ、ハチマキ」



真剣にバトルの行く末を見守るテガマルはそっと口に出した。

「チャンピオンの強さはもちろんのことだが、それに互角にやり合っているあの男、只者ではないな」

「おうよ！ バローネさんは超強いんだぜ？ ま、俺は勝ったけどな」

バローネとアラタの戦いをハジメは見つめる。

これが、本当の強者の戦い方なんだと胸に刻みながら。

## 【第1ターン】

「先攻は俺がもらうぞ、スタートステップ！」

月光のバローネ

[Life] 5

[Hand] 5

[Core] Reserve 4

[Spirit] なし

[Nexus] なし

[Burst] なし

[Mainstep]

「【ザীগン】をレベル2で召喚する」

白のシンボルが弾けて出てきたのは、赤いエビを模した機械。二門のキャノンを尖らせ、威嚇するように宙を一回転した。

「ターンエンド」

月光のバローネ

「Life」5

「Hand」5 4

「Core」Reserve 4 0 Field 0 3 Tra

sh 0 1

「Spirit」【ザニガン】

「Nexus」なし

「Burst」なし

「ふうん、バーストは無し、か……」

「フツ、バーストなど所詮我が友を飾るだけのパーツにすぎん。しかもその役割はブレイヴで十分だ」

「いいねそのスピリットに対する愛、だけどバーストに少しは頼らないと勝てはしないぜ？」

【第2ターン】

「俺のターンだな、ドローステップ！」

薬師寺アラタ

「Life」5

「Hand」5

「Core」Reserve 5

「Spirit」なし

「Nexus」なし

「Burst」なし

「MainStep」

「【リュザード】を2体、片方はレベル2で召喚だ！」

2つの赤のシンボルが弾け、幼竜のような小さな龍が2体フィールドに現れる。

「AttackStep」

「【リュザード】でアタック！ 気張ってけよ！」

リュザードは昇竜の如く空をかける。

「【リュザード】のアタック時効果発動！ 赤のスピリットの数だけBPを+10000！ よってBP40000だ！」

【リュザード】1(0) / 赤 / 翼竜

1 LV1 10000

2 LV2 20000

LV2『このスピリットのアタック時』

自分の赤のスピリット1体につき、このスピリットをBP+10000する。

「【ザニガン】でブロック……したら、やられるのはこちらか。いいだろう、ライフで受けてやる」

リュザードは口元から赤い炎を吐き出し、そのままバローネのライフを削った。

月光のバローネ

「Life」54

[ R e s e r v e ] 0 1

「ターンエンドだー!」

薬師寺アラタ

[ L i f e ] 5

[ H a n d ] 3

[ C o r e ] R e s e r v e 5 0 F i e l d 3 T r a s h

2

[ S p i r i t ] 【リユザード レベル2】 【リユザード レベル1】

[ N e x u s ] なし

[ B u r s t ] なし

【第3ターン】

月光のバローネ

[ L i f e ] 4

[ H a n d ] 4 5

[ C o r e ] R e s e r v e 1 3 F i e l d 3 T r a s h

1 0

[ S p i r i t ] 【ザীগアン】

[ N e x u s ] なし

[ B u r s t ] なし

[ M a i n S t e e ] p

「さて、この手札……どう動くか……!」

バローネの手札は既に【月光龍ストライク・ジークヴルム】のカードが来ていた。

このターンで出すことも可能だが、その場合はレベル1での召喚に

なる。

もしアラタがBP5000以上の激突持ちのスピリットを召喚した場合、相打ち、又は破壊されてしまう。

「だが、このカードならば……」

そう言っつて、

「バーストをセットだ」

バローネは1枚のカードをバーストゾーンにセットした。リアルバトルフィールドでのバーストセットはこれが初めてである。

「おお！ ついにバローネさんがバーストをセットした！」

「おいハチマキ、あの男はどのようなバーストを使うんだ……？」

テガマルはハジメの方は向かずに質問した。

それはこのバトルから一瞬でも目が離せない様にも見える。

「俺もわかんないけど、バローネさんは白使いだからバーストも白のを使うんじゃないの？」

これで下準備は終了、後は月光龍を呼ぶのみ。

バローネは天高く月光龍のカードを突き上げる。

「闇に映るは蒼白なる月……光を照らすはその眼光」

ズシン！ ズシン！ とフィールドに連続した振動が伝わる。

その音は徐々に大きく、強くなっていった。

「現れよ、月光の覇者！【月光龍ストライク・ジークヴルム】をレベル1で召喚！ 不足コストは【ザニーガン】から確保だ」

バローネの背後から現れた銀鱗の鎧を纏いし白銀の龍。バトルフィールドの砂を巻き上げ、ゆっくりと着陸する。

「月光龍、か……アントニーを思い出すぜ。いや、あいつは月光神龍のほうだったかな？」

「安心しろ、我が友は月光龍だけではない、月光神龍もそうだ」

「あ、そう……」

「Attack Step」

「行くぞ、我が友よ。【月光龍ストライク・ジークヴルム】でアタック」

バックパックのスラスターを最大質力で放出して突進する月光龍。

「ライフで受けるぜ……」

上空からアラタの元へと向かって急降下すると両足の爪を剥き、一気に引き裂く。

「ひびく……！」

薬師寺アラタ

「Life」54

「Reserve」01

「ツあ〜、効いたぜ。流石Xレアの一撃ってとこだな」

「……ターンエンド」

月光のバローネ

「Life」4

「Hand」5 3

「Core」Reserve 3 0 Field 3 1 Tra

sh 0 5

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム】

「Nexus」なし

「Burst」???

#### 【第4ターン】

薬師寺アラタ

「Life」4

「Hand」3 4

「Core」Reserve 1 4 Field 3 Trash

2 0

「Spirit」【リユザードレベル2】【リユザードレベル1】

「Nexus」なし

「Burst」なし

「MainStep」

「ほいじゃまー、俺もバーストをセットと……」

「Burst」なし  
???

「そして、【カグツチドラグーン】をレベル2で召喚！ 不足コストはレベル2の【リュザード】から確保、よってレベル1にダウンだ」

「Core Reserve 4 0 Field 3 5 Tra  
sho 2

赤のシンボルが弾け中型の竜が召喚される。

炎を纏った翼でその竜は火花をまき散らした。

「Attack Step」

「【カグツチドラグーン】でアタック！ アタック時効果で月光龍には必ずブロックしてもらっぜ！」

【カグツチドラグーン】

4 (2) / 赤 / 古竜

1 LV1 3000

3 LV2 6000

LV1・LV2『このスピリットのアタック時』

自分はデッキから1枚ドローする。

LV2【激突】『このスピリットのアタック時』

相手は可能ならば必ずブロックする。

薬師寺アラタ

「Hand」2 3

「そつだな……俺はそのアタックを我が友でブロックしなくてはいけない。その場合破壊されるのは俺の我が友の方だ」

ただし、と付け加えて。



「それは俺がこのまま何もしなかったら話だな」

「なにっ!？」

「スピリットのアタックによりバースト発動だ。マジック、【光速三段突】」

カグツチドラグーンが火炎の翼をはためかせ、月光龍に突進する。

月光龍はそれを右側にいなし、カグツチドラグーンの腹部を思いっきり蹴りあげて空へと浮かせた。

光・速・三・段・突、という5つの文字がバンバンと現れ、一つ一つが月光龍に取り込まれていく。

すると月光龍の身体がほのかに光に包まれ

ザン！ ザン！ ザン！ と空中に浮かぶカグツチドラグーンに3つの閃光が走った。

それはマジックの力を借り、光に近い早さで二回の攻撃を与えた月光龍であったのは言うまでも無い。

【光速三段突】

6(3)/白

【バースト：相手のスピリットのアタック後】

このターンの間、自分のスピリットすべてをBP+3000する。

「なるほど、そのバーストでBPを上げて返り討ちにしたってわけか、なかなかやるねえ」だが、それも読み通りだぜ！」

アラタのセットしたバーストがはじき出され空を舞う。

「相手による自分のスピリットの破壊によりバースト発動！ 【双光

気弾】!!」

【双光気弾】

3(1)/赤

【バースト：相手による自分のスピリット破壊後】

自分はデッキから2枚ドローする。その後コストを支払うことで、このカードのフラッシュ効果を発揮する。

フラッシュ：相手の合体スピリットのブレイヴ1つを破壊する。

または、相手のネクサス1つを破壊する。

薬師寺アラタ

「Hand」3 5

「ここまで読んで来るとは……世界チャンピオンの名は伊達ではないな」

「ははっ、照れるな」

アラタはその後アタックはせず、ターンエンドをした。

薬師寺アラタ

「Life」4

「Hand」5

「Core Reserve」0 3  
「Field」5 2  
「Tra

「Spirit」【ブーザー】

「Nexus」なし

「Burst」なし

【第5ターン】

月光のバローネ

「Life」4

「Hand」3 4

「Core」Reserve 0 6 Field 1 Trash

5 0

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム】

「Nexus」なし

「Burst」なし

「MainStep」

「ネクサス、【光の聖剣】を配置する」

バローネの背後に巨大な剣がそびえ立った。天からはその剣に光が差し、眩いばかりの光を反射させる。

「Hand」4 3

「Core」Reserve 6 3 Field 1 Trash  
0 3

「AttackStep」

「我が友よ、アタックだ」

「あれ？ バローネさんリザーブにコアが三個あるのに月光龍に置かなかった……これじゃレベル1のままだ……」

ハジメは頭をかしげる。

これは単なるプレイミスなのか、それとも何か狙いがあったことなのか区別がつかないからだ。

「そいつはライフで受けるぜ」

薬師寺アラタ

「Life」4 3

「Core」Reserve 3 4

「ここでターンエンドと行こう」

月光のバローネ

「Life」4

「Hand」3

「Core」Reserve 3 Field 1 Trash 3

「Spirit」【月光龍ストライク・ジークヴルム】

「Nexus」【光の聖剣】

「Burst」なし

【第6ターン】

薬師寺アラタ

「Life」3

「Hand」5

「Core」Reserve 4 7 Field 2 Trash

2 0

「Spirit」【リユザーズ】【リユザーズ】

「Nexus」なし

「Burst」なし

「MainStep」

「へへ、んじゃ今度はこれだー！」

アラタはまた新しいバーストをセットする。

「そしてお次はワンチャンの登場だ！ よろしく頼むぜ」

ワンチャンと言って、召喚したのはまたもや、【激突】持ちのスピリット、【ワン・ケンゴロー】である。

Core Reserve 7 5 Field 2 3  
Trash 1

このカードはハジメとの戦いの時にも対峙したことがあるので効果はよく知っていた。

「いつは自分のバーストがセットされている間レベル3として扱う。よってBPP6000の激突持ちだ！」

【ワン・ケンゴロー】 3 (2) / 赤 / 皇獣

1	LV1	20000
3	LV2	40000
5	LV3	60000
	LV1・LV2・LV3	

自分のバーストをセットしている間、このスピリットをLV3として扱う。

LV2・LV3【激突】『このスピリットのアタック時』

相手は可能ならば必ずブロックする。

Attack Step

「ワン・ケンゴロー」でアタック！ 今度もまたブロックしてもらおうぞ

「！」

「いいだろう……【月光龍ストライク・ジークヴルム】でブロック！」

「なあテガマル。今のバトルどう思う？」

「バローネという男は、まだ手を隠しているな。そうでなければ月光龍をレベル3に上げているはずだ」

「だよな……でもマジックの使用ならスピリット上からも取れるし、リザーブに置かないとできないことといったら……あっ!!」

ワン・ケンゴーの額にある日本刀の斬撃をかわし、月光龍は口から紫電を放つ。しかしレベル1ということもあり圧倒的にパワーが不足していた。

ワン・ケンゴーは額の日本刀でその紫電を受け止め、弾き返す。弾き返された自分の紫電をもろに受け、月光龍は地面に叩き落された。

身動きのとれていない今がチャンスと、ワン・ケンゴーは日本刀を突き立て、月光龍に突進する。

「フラッシュタイミング」

その距離は10メートル、6メートル、2メートルとどんどん縮まっていった。

あと僅か1メートル。このままワン・ケンゴーが突進すれば、月光龍はその刀の餌食となる。

はずだった《…………》。

ガギイ!! と金属音が重なって聞こえた。

ワン・ケンゴーが見たのは、自身の日本刀よりもはるかに巨大な刀を口に啞えて競り合っている月光龍の姿。

全身の白を包むようにして、黒い艶のある甲冑が身体を覆っている。

「【コテツ・ティーガー】を神速召喚、そして月光龍に直接合体だ」

むき出しの野生を刃に乗せ、月光龍はそのまま振り切る。

その一撃は、ワン・ケンゴーの刃を完膚なきまでに砕いた。

グオオオオオオオ!!

月光龍の咆哮がフィールド内に勇ましく響く。その音はワン・ケンゴーを竦ませ、動きを封じた。

「なんとも良い雄叫びだ、我が友よ」

聞き惚れるかのようにバローネは目を閉じ満足気に微笑する。

「まさか【神速】を使うとは！ さっすがバローネさん！ まったく読めないぜ！」

さてフィニッシュだ、とバローネは呟いて。

「切り裂け、合体《ブレイヴ》スピリット」

月光龍の口に加えている刃がバリバリと紫電を纏い火花を散らす。

月光龍は大きく空へと舞い上がった。

高く、どこまでも高く。

そして、ある程度距離をとったところで、今度は一気に急降下する。標的はワン・ケンゴー、ただ一匹。

ザシユウウウウウ!!!

まるで空間を歪ませるかのような激しい斬撃。

ワン・ケンゴーは一瞬でチリに帰り、消えていった。それでも斬撃の余波は続きフィールド全体が震動する。

その振動にのけぞりそうになりながら、アラタは顔を上げる。そこには、ライフを今にも斬り刻まんとする月光龍がいた。

【コテツ・ティーガー】の効果発動。ライフを1つもらっぞ

月光龍はアラタの前に展開されたバリアを一刀両断した。

薬師寺アラタ

「Life」3 2

「残念だったな、薬師寺アラタ。貴様のアタックはまたしても無駄になってしまったぞ?」

今まで沈黙を守り続けてきたアラタはそこでようやく口を開いた。

「いや そっでもないぜ?」

「な?」

フィールドが突如として暗雲に包まれる。薄暗い雲からは激しい雷鳴がなり、豪雨が降り注ぐ。



そしてその雲切り裂くようにして現れた一体の龍。  
巨大な体に堅牢な剣を携え、その姿は古代の英雄を彷彿させる。

「見な、これが俺の相棒」

その龍は月光龍に向かって斬撃による衝撃波を繰り出す。月光龍はそれをヒラリとかわしてコテツの刃を借り喉元を切りつけようとする。

だが

まるで子供のいたずらをたしなめる親のように、いかにもあっさり、いかにも優しく、いかにも当然の「ごとく」。その龍は手のひら一本だけで月光龍の刃を押さえつけた。

そしてもう一本のあいた手には剣が握り締められている。  
首を切断するかのごとく、その龍は動きを封じている月光龍に向けて剣を薙ぎ払った。

激しい雷鳴が響く中、月光龍の生命の鼓動が

止まった。

ドゴオオオオオオオオオ!!

合体スピリットの破壊により大きな爆炎が上がる。

アラタは笑いながらバーストとしてセットされていたカードを大きく突き出す。

「【龍の覇王ジーク・ヤマト・フリード】だ!!」

8 Core 激突！ 龍の霸王 VS 月光神龍（中編）

「燃え上がれ赤き龍!! 熱く!! 激しく!! 魂の雄叫びを今ここに!!  
霸王（ヒーロー）×レア、龍の霸王ジーク・ヤマト・フリードを  
レベル3で召喚!!」

薬師寺アラタ

「Core」Reserve 7 2 Field 2 7 Tra  
sh 1

月光龍が【コテツ・ティージャー】の力を借り、削ったライフ。それは古の力を携える龍の霸王の封印を解く引き金になってしまった。圧倒的な力にねじ伏せられ、月光龍はいともたやすく龍の霸王に破壊される。

これが龍の霸王のバースト効果。

【バースト：自分のライフ減少後】

自分のライフが3以下のとき、BP15000以下の相手のスピリット1体を破壊する。

この効果発揮後、このスピリットカードを召喚する。

「なんだ、と……我が友が……」

月光龍を破壊され、大きく動揺するバローネ。元の世界では馬神弾を最初として、数々の猛者に月光龍を破壊されてきた。

それはいつでも、バローネの心を響かせ、苦しめた。月光龍はバローネにとってのプライドであり一番の相棒なのだ。

破壊されて涼しい顔なんてできるはずがなかった。

だからこの世界に来てからはまだ一度も月光龍は破壊されてはいなかった。

それがこのバトルで再び破壊されてしまったのだ。

「ふん、そんなにキースピリットの破壊がショックかい？ だけどいちいち動揺してるようじゃ俺には勝てないぜ」

まだアラタのアタックステップは終わっていない。

アラタは【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】のカードを傾けて、

「ジーク・ヤマト・フリードでアタックだ！ アタック時効果で【コテツ・ティーガー】を指定してアタックする！」

ゴオオオオ!! と、龍の霸王の持つ剣が豪炎に包み込まれる。その刃で龍の霸王はコテツ・ティーガーに避ける暇さえ与えず、切り裂いた。

「どちらも破壊とききたか……」

テガマルは表情は変えずそれだけ呟く。

「やばいよバローネさん!! フィールドがから空きになっちゃった!!」

「まだまだ!! リュザード二体でアタック!!」

二匹の竜が息を合わせてバローネに炎を吐く。

今のバローネのフィールドには何もいない。そう、ライフを守るスピリットさえも。

「く……ライフで受ける……！」

月光のバローネ

[Life] 4 2

[Core Reserve] 1 3 [Trash] 6

「ふう……何にでも倍返しじゃ俺のルールでね。ターンエンド」

[Endstate] p

薬師寺アヲタ

[Life] 2

[Hand] 3

[Core Reserve] 2 [Field] 7 [Trash] 1

[Spirit] 【リムザード】 【リムザード】 龍の覇王ジーク・ヤ

【ブローリ・トマ

[Nexus] なし

[Burst] なし

【第7ターン】

[Start & Core & Draw State] p

月光のバローネ

[Life] 2

[Hand] 2 3

[Core Reserve] 3 4 1 0 [Field] 0 [Tr

ash] 6 0

[Spirit] なし

[Nexus] 【光の聖剣】

「Burst」なし

(くそ……手札が悪いな)

バローネがドローステップで引いたカードは【突機竜アーケランサー】。

優秀なブレイヴカードだがシンボルがない。つまりはこれでアタックしてもアラタのライフは減らせなかった。

「Mainstee」p

バローネは三枚のカードの中から一枚を抜き出し、バーストゾーンにセットした。

続けてのもう一枚は、

「ザニーガン」をレベル1で召喚する

白いシンボルから現れたのはエビを模した機械の獣。スラストターを回転させ、柔らかく着地した。

「Hand」3 1

「Core」Reserve 10 9 Field 0 1 Tr

asho

「Burst」なし ???

しばらくバローネは沈黙した。

自分の残りの手札は1枚。この【突機竜アーケランサー】を召喚すれば効果で1枚ドロー出来るが、そこで引き当てたカードがこの場面で全く使えないカードだったらどうする？

それなら様子見て温存しておいたほうが……

そんなことを考えていた時だ。

ドクン。とうかすかな鼓動がデッキから、正確にはデッキトップのカードから聞こえてきた。

まるで “自分を引け” と言わんばかりに。

バローネはフツと静かに笑う。

そうだ、自分には “もう一体の友” がいたではないか。

バローネから後ろ向きな考えは消えた。もう迷わない、ただ “友” を信じればいいのだ。

手札の最後のカードを抜き取り、ディスプレイにそつと置く。

「続けて、【突機竜アークランサー】を召喚。召喚時効果でデッキから1枚ドロウするぞ」

「Core Reserve 6 Field 1 2 Tra  
sh 0 3

突機竜アークランサー

Level『このブレイヴの召喚時』

自分はデッキから1枚ドロウし、相手のネクサス1つを破壊する。

そして、バローネが引いたカードは……

「闇を照らす銀鱗、」

バローネの言葉とともにバトルフィールドの上空は夜の闇に包まれていく。

光の聖剣が照らし出す先には満ちた月。まったく欠くことなく

完璧な円を描く月が現れていた。

「夜を統べる高貴なる龍、」

ドプツと、まるで水面《みなも》に映し出された月のように、その月は水面を立てて、ある者を呼び出す。

それは、白き龍だった。

紫のバイザー越しに光る一対の瞳。研ぎ澄まされた刃のような牙と爪。そして蒼と白のツートンカラーで彩られた鎧は月に照らされ刺々しくも美しく輝く。

「我が友、月光神龍ルナテック・ストライクヴルム、レベル1で召喚!!」

「Core Reserve 60 Field 23 Tra  
sh 38

ザアアアア!! と砂埃を立ち上げ、バトルフィールドに降り立った月光神龍。

その瞳は目の前にいる龍の霸王を敵と認識したらしく、威嚇混じりの鋭い瞳へと変化する。

「おおっ!! 月光神龍VS龍の霸王って言ったらあの時と同じだなテガマル!!」

「ユーロチャンプとの戦いの時か、だが今回のほうが月光神龍は龍の霸王にとって手強くなるな」

「……? びびりしてんだ?」



「見ていればわかる」

「今宵は月。合体《ブレイヴ》するにはいい夜だ……」

バローネは上空の月を眺めながらそう呟く。そして、突機竜のカードを月光神龍の上に重ねると、

「紅く染まれ、月明かりの龍よ。双対の槍と共に！ 突起竜アーケランサーを月光神龍ルナテック・ストライクヴルムに合体《ブレイヴ》！」

アーケランサーの本体から二本の槍が外れ、それを月光神龍は力強く掴む。そしてアーケランサー本体は月光神龍のバックパックに接続された。唸りのような咆哮がバトルフィールド全体を包み、月光神龍の姿がみるみる紅へと染まっていった。

その姿はまるで数多の鮮血で染まったかのごとく、凶暴で、凶悪で、禍々しい。だがそこには確かに引き込まれるかのような“美”が存在していた。

「AttackStep」

「来るかい。月の使い手さん！」

アラタはこの状況を楽しんでいるかのように笑う。  
それに答えるかのようにバローネも笑みを浮かべながら、

「もちろんだ。ザニーガンでアタック！」

アラタのライフは残り2。バローネのフィールドにはゼニーガンと合体スピリットの2体。つまりこのまま何もなければバローネの総アタックで決まる。

「甘いな、マジック【絶甲氷盾】を使用！ 不足コストは龍の霸王から確保するぜ」

アラタの前には虫の複眼のように幾重に折り重なられた結晶が展開する。

「そして、そのアタックはライフで受けるぜ！」

ゼニーガンは速度を一定に保ちながら、アラタへと直進し、激突した。

バリイイイ！ という嫌な機械音のアラタの頬をかすめるかのように通り過ぎる。展開された白のバリアは粉々に粉碎され、破片だけが飛び散った。

薬師寺アラタ

[Life] 2 1

[Hand] 3 2

[Core] Reserve 2 0 1 Field 7 5 T

rash 1 5

「絶甲氷盾の効果でアタックステップを強制終了されてしまったか。ここはターンエンドしかないな」

[Endstep]

月光のバローネ

[Life] 2

「Hand」0  
「Core」Reserve 1 Field 2 Trash 8  
「Spirit」【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム（突機竜  
アーケランサー）】【ザニーガン】  
「Nexus」【光の聖剣】  
「Burst」???

### 【第8ターン】

「Start&Core&DrawStep」

薬師寺アラタ

「Life」1  
「Hand」2 3  
「Core」Reserve 0 1 6 Field 5 Tra  
sh 5 0  
「Spirit」【リュザード】【リュザード】【龍の霸王ジーク・ヤ  
マト・フリード】  
「Nexus」なし  
「Burst」なし

「うっっん、これは厄介だな」

アラタは顎に手を当てながら考える。自分の手札には今1枚も  
バーストがない。それよか召喚できるスピリットがいなかった。

「MainStep」

「龍の霸王をレベル3にアップ！そして」

バギン、バキンバギン、バキンバキンバキン!! と、鈍い音が連続

してフィールド全体に響き渡る。それはまるで地割れが起きているかのような、地面がぐちゃぐちゃにひしゃげる音。

「ネクサス【永久凍土の王都】を配置！ さあ市街地戦と行こうぜ」

「Hand」3 2

「Core」Reserve 6 0 Field 5 7 Tra  
sh 0 5

バトルフィールドの大きさが通常の5倍以上に拡大され、バローネとアラタの距離は更に遠ざかる。

隆起しだした地面から出たきたのは、まさに王都といっても差し支えない立派な建築物だった。

バトルフィールドの中央にはそびえ立つ王宮、その周囲を取り囲むかのようにして、住宅街が広がる。

「またもフィールド全体に影響を及ぼすネクサスか。演出としては最高だな」

眼前で凍りつく王都を見ながらバローネは笑う。

手持ちのスピリット達も急に変わった光景に驚いたらしく、辺りをきよろきよろと見渡していた。

「Attack Step」

「行くぜ相棒！ 龍の霸王ジーク・ヤマト・フリードでアタック！ アタック時効果でザナーガンを指定だ!!」

「仕方ない。ザナーガンでブロックをしよう」

両者の間には沢山の建物が並び、それが視界を妨げる。お互いどこ

から攻撃がされるかわからない状態での探りあいになるのだ。

先に仕掛けたのはゼニーガンだった。

小柄な体を活かし、建物に隠れながら龍の霸王の動きを伺う。

そして、隙が出きたところに

ズドン！ という銃声が響いた。狙われたのは龍の霸王の翼、狙った者はゼニーガンの一対の砲塔。

しかしその攻撃は全く無に等しいものだった。

龍の霸王は、まるで何事もなかった様に、翼をバサバサと揺らし、ゆっくりと後ろを振り返る。

そして、手に握られた剣《つるぎ》からは何千度にも達する炎が一瞬にして燃え上がった。

グオオオオオオ!!!

振り返ったと同時に、龍の霸王はゼニーガンが隠れていた建物ごと薙ぎ払う。凍りついていたはずの建物は一瞬にして塵と帰り、“永久凍土”なんて言葉が鼻で笑えそうになる。

斜めに切り込みを入れられ、上半分が消滅した建物。そこから逃げ出すようにしてゼニーガンは飛び出した。

この圧倒的段違いな戦力差では真正面から挑んでも勝てないと判断したからだ。

だが龍の霸王はそれを決して逃さない。かるく両足を屈折させる  
と、

「とどめだー！ やっちまいな相棒！」

地面をえぐるかのようにして一気に跳躍した。

10メートル以上の高さで飛行しているザニーガンは、そのたった一回の跳躍で追いつかれた。

龍の霸王はその勢いのまま、空中で斬撃を加える。

あまりの早さで振りぬかれた剣はザニーガンの感覚を鈍らせる。ザニーガンがようやく切られたことに気づいたのは、龍の霸王が地面に着地してからだだった。

激しい爆音が響く。

背後の爆音でザニーガンの破壊を確認すると、龍の霸王は刀の錆を落とすかのように軽く剣を振るった。

ドロローの弱い白にとって、スピリット一体の破壊はなかなか重い。その為、手札が0の状態ではザニーガンが一体なくなったことでさえもバローネにとっては痛手だった。

しかしバローネからは苦渋の表情は何えない。と、言うよりもこのタイミングを待っていたかのようにだった。

「甘いな、スピリット破壊によりバースト発動」

龍の霸王の勝利はつかの間。破壊されて木っ端微塵になったザニーガンを包み込むようにして巨大な氷の結晶が形成される。

まるで時間を巻き戻すかのようにして、ザニーガンはその結晶の中で再生されて行く。

「マジック【幻影氷結晶】。悪いがザニーガンは手札に戻させてもらおう」

幻影氷結晶

【バースト：相手による自分のスピリット破壊後】

このバースト発動時に破壊された、自分のトラッシュにあるスピ

リットカード1枚を手札に戻す。

前と何一つ変わらない状態まで回復したゼニガンは、そのままバローネの手札へと戻った。

「ヒューー。ブレイヴを主にした戦術らしいけど、ちゃっかりバーストも使ってくるんだねえ。いやぁ抜け目がない」

「フツ……さっきも言っただろ？俺にとってのバーストとブレイヴは我が友を引き立てるためのものでしかない、そこに特にこだわりはない。バーストだろうが有能なものは取り入れるだけだ」

「ははっ！ 戦っててまったく退屈しないな、あんた！ ターンエン  
「ト」

[Endstep]

薬師寺アラタ

[Life] 1

[Hand] 2

[Core Reserve] 0 [Field] 7 [Trash] 5

[Spirit] 【リユザード】 【リユザード】 龍の霸王ジーク・ヤ

【マ・アム

[Nexus] 【永久凍土の王都】

[Burst] なし

【第9ターン】

[Start&Core&DrawStep]

月光のバローネ

「Life」2

「Hand」1 2

「Core」Reserve 2 3 1 1 Field 1 Tr

ash 8 0

「Spirit」【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム（突機竜アーケランサー）】

「Nexus」【光の聖剣】

「Burst」【幻影氷結晶】 なし

「MainStep」

「光の聖剣をレベル2に、我が友をレベル3に、それぞれアップさせる」

「Core」Reserve 1 1 5 Field 1 7 Tr  
ash 0

紅《くれない》の月光神龍と、厳粛くなる光りを帯びる光の聖剣は、更に力強い光に包まれフィールドに見えない重圧を張り巡らす。

ダン！ と足踏みをして月光神龍は建物の屋上までと上り、見渡しの良い場所へと移った。これから先の標的を 必ず仕留めるために。

「続けて、ザニーガンを召喚。 もちろんレベルは2だ」

先程【幻影氷結晶】の効果で手札に戻ったザニーガンが再び召喚される。なお、レベル2からは【重装甲赤】が付随されるのでヤマトの効果も受けない。

再び残り一枚になった手札を横目で確認すると、バローネはためらわずにそれをバーストゾーンへとセットする。



「Hand」20

「Core」Reserve 5 1 Field 7 10 Tr  
asho

「Burst」なし ???

「おっ。またしてもバーストか」。これは厄介だなあ、うん」

一人ぶつぶつと呟くアラタを尻目にバローネはアタックステップに入った。

「Attack Step」

「行け！勇猛たる我が友よ。最後のライフをその槍で貫け！」

バローネがかざす手のひらの先には、アラタが。

そして指示があった瞬間に、月光神龍は大きく飛翔してそこへと突撃する。天にまでとときそうな高さの王宮を避けながら月光神龍は確実にアラタの元へと迫っていく。

「リユザード… ブロックを頼んだぞ！」

キイと小さな声を漏らし、月光神龍に立ちはだかったのはリユザード。月光神龍は両手に持った槍の両端を接合し、両刃剣へと変える。

一閃。

超高速で振り払われた両刃剣はリユザードを二度切りつけた。

同時に、ズズズズズ、というコンクリがこすれ合う乾いた音が聞こえてくる。それはリユザードの背後にあった建物までもが、まるでかまぼこのように3枚におろされた瞬間だった。

「さらに、【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム】のバトル時効果が発動。BP以下のもう一体の【リュザード】を手札へ戻す！」

月光神龍の追撃が続く。

地面に着地した後、月光神龍はそのまま前方へと滑空した。目の前に立ち塞がる建築物と風を斬る音、そしてその姿は破壊の化身を彷彿させるかの容姿。

近くの建築物をほぼ粉々に破壊したあと、そこに隠れていた1体のリュザードが姿を現す。

もう逃げも隠れもできない、そう伝えるかのように、怯えるリュザードとの距離を一步步詰めていく。そして、月光神龍は足の爪をぎらりと尖らせ、力の限り蹴飛ばした。

まるで、サッカーボールのようにぶっ飛ばされたリュザードは壁に何度も激突し、そのまま手札へと帰る。

「やれやれ、手札に戻すだけだったのに、随分とあんたのお友達は乱暴だな」

弾き出されたリュザードのカードを掴むと、アラタは苦笑い気味に呟いた。

「月と言つものは、美しさと共に凶暴性も秘めているのでな。だがそこがまた美しさを際立たせる鍵となるのだ……」

うつとりと見惚れるかのようにしてバローネは次のカードを傾ける。

「さて、これで幕引きだ。ザニーガン……やれ」

ブオンというエンジンの起動音が聞こえ、ザニーガンはスラスタ

から青白い炎と煙を巻き上げ突進する。

ほぼ半壊状態に近い建物はそれほど進行の邪魔にはならず、スムーズに先へと進ませる。

アラタのライフは1。そして月光神龍により2体のリユザードがいなくなった今、フィールドにはザニガンのアタックを止める者はいなかった。

「へへッ。来な！ ライフで受けるぜ！」

「ええっ!?マジックは!?フラッシュでなんかないの!?!」

映しだされたディスプレイの前でハジメは驚きの言葉を隠せなかった。なんせ、未だ負けを知らない世界チャンピオンのライフがここで0にされようとしているのだから。

それはつまり、世界チャンピオンの初めての敗北を意味する。今まで誰も辿りつけなかったその場所にバローネが立とうとしているのだ。

「いや……よく見てみるハチマキ。チャンピオンの顔はまだ勝負を捨ててなんてない」

冷静な口調で戦況を見守るテガマルはハジメにそう指摘した。その隣りにいるチヒロとコブシも頷いて、

「ああ……あの目はまだ負けてはいない」

「おっす！ それよか勝ちへの執念が更に燃え上がってるぜ」

3人の言葉を頼りにハジメも画面のチャンピオンの顔をじっと見つめる。

しばらく眺めてハジメはハッとした。

「ほんとだ……！ チャンピオンは全然負ける顔をしてない!! しかもかなり楽しんでいる!!」

「ほう、ライフで受けるか……？ しかもフラッシュはないと？」

おう！ と強く言葉を返すアラタを見て、バローネは目を瞑《つむ》る。

そして段々とつり上がる口の端からは鋭い犬歯があらわになり、

「いい覚悟だ!! 最後のライフを砕け！ ザニーガン!!」

ギン！ とバローネの目が見開かれた。満たされた勝利への欲求に満ちて口元を歪めながら。

ザニーガンは高台に着くと、取り付けられたキャノンからアラタを狙撃する。

放たれた3発のビームはそれぞれが折り重なり、1本の太い光線へと変化する。それはただまっすぐに、ただ直線に、ただアラタだけを追って突き抜ける。

スガガガガガ!!! と、アラタの前に展開された白のバリアがそれを受け止め、鈍い音をあげる。度重なる衝撃に対しての悲鳴にも似たその音は、いつもよりも数倍騒がしい。

そして、それに同調するかのように胸にはめこまれたアラタの最後



「残念だったな！ ここで【永久凍土の王都】の効果が発動するぜ！」

永久凍土の王都

自分のライフが0になるとき、このネクサスを自分のトラッシュに置くことで、自分のライフは0にならない。

その後、ボイドからコア1個を自分のリザーブに置く。

薬師寺アラタ

5 「Core Reserve 0 1 Field 7 Trash

覆い尽くす氷が完璧に砕け散ったあと、残された王宮はまるで霧のように消えていった。

それによりバトルフィールドの大きさも通常大きさに戻り、いつものまっさらなフィールドへと戻る。

「なるほど……そのネクサスは単なる演出というわけではなかったのだな」

チツと軽く舌打ちをして、バローネはターンエンドの宣言をする。どうも自分は最後の1手に欠くらしい、そんなことを考えながら。

9 Core 激突！ 龍の霸王 VS 月光神龍（後編）

【第10ターン】

[Start&Core&DrawStep]

薬師寺アラタ

[Life] 1

[Hand] 3 4

[Core] Reserve 3 4 9 Field 5 Tra  
sh 5 0

[Spirit] 【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】

[Nexus] なし

[Burst] なし

[MainStep]

アラタは引いたカードを見て、にやりと笑みをこぼす。

「良いカードを引いたぜ！ 【剣馬グラニム】、レベル2で召喚！」

[Hand] 4 3

[Core] Reserve 9 4 Field 5 7 Tra  
sh 0 3

白のシンボルが弾けて現れたのは、その白とはまったく対極に位置する漆黒を連想させる黒。僅かな光も通さないその黒は馬の形をしていた。

【剣馬グラニム】……また厄介なものを」

「まだまだ行くぜ！ 龍の霸王をレベル4にアップし、バーストをセッター！」

[Hand] 3 2

[Core Reserve] 4 1 Field 7 10 Tr  
ash 3

[Burst] なし  
???

[Attack Step]  
[p]

「そしてアタックステップ！ 【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】でアタック！ アタック時効果で月光神龍を指定アタックだ！」

「わわわ！ 今度は龍の霸王の指定アタックかよ！ バローネさんの月光神龍は合体《ブレイヴ》しててもBP14000。チャンピオンのヤマトはBP20000じゃ破壊されちまうよー！」

「馬鹿ハチマキ。何でテガマルはさっきユーロチャンプの時の月光神龍よりも今回の方が苦戦すると言ったと思ってるんだ？」

騒がしいハジメをたしなめるようにチヒロが呟く。

「なんでって……なんでだよ！ わっかんねーよー！」

「おっす！ ハジメは赤ばかりを使ってるからな！ 白の月光神龍の真骨頂を知らないってわけか」



コブシは物知り顔でハジメに話しかけてくる。  
そして月光神龍が合体しているブレイヴの色はなんだ？ と尋ねた。

「色は……【突機竜アーケランサー】だから……赤だよな。それがどうかしたのか？」

まるで無知なハジメに呆れたかのようにテガマルはため息をついて、

「月光神龍の効果で最も有名なのが【重装甲・可変】。月光神龍自身が持つ色のカードの効果は受けないというトリッキーな効果だ。要するに今、月光神龍には元々から持つ白と、ブレイヴによって与えられた赤の色がある」

「あーなるほど！ つまり月光神龍は【重装甲・赤／白】を持ってるというわけか。だからヤマトの指定アタックも無効ってわけだな！」

「そういうことだ。ちなみにユーロチャンプがブレイヴした時は紫の【デスヘイズ】だった。つまりあの時の月光神龍には【重装甲紫／白】しかなく、ヤマトの効果も通ったというわけだ」

月光神龍の前方には六角形の赤いバリアが展開し、それが龍の霸王を弾き返す。

「【重装甲・赤】発動だ。龍の霸王のアタックは月光神龍ではなくライフで受けさせてもらおう」

「おっとそうだったそうだった。いやーすっかり装甲のこと忘れてたなーははは」

アラタはいかにもわざとらしい笑い声を上げながら頭を掻いた。  
おそらくは月光神龍の効果を知らない子供たちのためのパフォーマンスなのだろう。

龍の霸王は体制を立て直し、標的を月光神龍からバローネへと変更する。

そして口からは咆哮とともに巨大な火炎を放った。

「グッ……！」

月光のバローネ

「Life」2 1

「Core Reserve 1 2 Field 10 Tras  
h o

バローネの4つ目のライフが削られた。これで残りライフの数はアラタと同じ1。

そしてバローネの設置したバーストは発動しない。このことからアラタにバースト条件が【相手による自分のライフ減少後】ではないことが見透かされてしまった。

「さーて。これにてターンエンド。こんなに手に汗握る戦いはいつぶりかな？」

「Endstep」

薬師寺アラタ

「Life」1

「Hand」2

「Core」Reserve 1 Field 10 Trash 3

「Spirit」【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】【剣馬グラニ

ム

「Burst」???

「Nexus」なし

### 【第11ターン】

「Start&Core&DrawStep」

月光のバローネ

「Life」1

「Hand」0 1

「Core」Reserve 2 3 Field 10 Trash

h 0

「Spirit」【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム（突機竜

アーケランサー）】【ザニーガン】

「Nexus」【光の聖剣】

「Burst」???

「MainStep」

「……」

バローネはしばらく沈黙したまま、今の状況と睨めっこをしてい  
た。

今のアタックを躊躇《ためら》わせる存在は【剣馬グラニム】。

【剣馬グラニム】の効果は、自分の赤のスピリットにBP6000以下の  
スピリットと合体スピリットのアタックを疲労状態でブロックで

きるようにするという効果である。

バローネの手持ちのスピリットはBP3000のザニガンと合体スピリットの月光神龍。

つまりはどちらも疲労状態の龍の霸王にブロックされてしまうということである。

(仕方ない……ここは動かずターンエンドを……)

その時。

バローネは何か引つかかった。自分はなにか大きな穴を見落としてはないかと。

「ッ……」

そう、【剣馬グラニム】の効果は絶対ではない。BP6000以下と合体スピリットのアタックが龍の霸王にブロックされてしまうというのなら

「そうか、ここまで思考が鈍るとは……俺の腕も落ちたものだな」

バローネは自称気味に笑うと、

「月光神龍から……突機竜アーケランサーを外す！」

突機竜アーケランサーのカードを月光神龍からずらし、合体解除をした。

月光神龍の両手に握られた二本の槍が宙に浮くと、バックパックから切り離された突機竜の本体がそれを回収する。

月光神龍は【重装甲・可変】の効果がまた白のみとなり、体色も白のものへと戻った。

「やれやれ、気づかれちゃったか……」

アラタはぎくりとしながら手札をうちわ代わりにしてパタパタと仰ぐ。

「更に、ネクサス【絶望壁の要塞】をレベル2で配置。不足コストは【光の聖剣】から確保する」

ゴゴゴゴゴという地響きとともに、バトルフィールド全体を包み込む巨大な壁が出現した。

その無機質な壁から覗かせる穴が、一々不気味で背筋にひんやりとしたものを伝わせる。

月光のバローネ

[Hand] 1 0

[Core Reserve] 3 0 Field 1 0 1 1 T

Rasho 2

[Attack Step]

「これで決めるぞ……【月光神龍ルナテック・ストライクヴルム】！  
ラストアタック!!」

ギン!! と両手の爪をむき月光神龍はアラタに突進を仕掛ける。

「剣馬グラニムの効果で龍の霸王でブロック！……は、できないか」

アラタの焦り気味の声が聞こえてくる。

そう、剣馬グラニムが赤のスピリットに与えられる疲労ブロックの範囲は、BP6000以下と合体スピリットのみ。

ということは、だ。

合体《ブレイヴ》せずにBPを7000以上にすればいいだけの話。だからバローネは月光神龍からブレイヴを外し、素の状態へと戻した。月光神龍は合体しない状態でもレベル3でBP11000という高火力なのでBP7000以上なんて軽く超えられる。

つまり合体せずにBP11000の月光神龍を、龍の霸王は疲労状態でブロックする事はできなかった。

「ちあどつする？ ライフで受けるか、グラニムでブロックするかのどちらかしか無いぞ？」

バローネはアラタを試すように二択を与える。

しかしライフで受ければその時点でアラタのライフは0になり、負けが確定する。

剣馬グラニムでブロックするにしたって、月光神龍に破壊され、連鎖的に龍の霸王も疲労ブロックを失いザニーガンによるアタックを通すことになってしまふ。

どちらを選んだってライフが0になる運命からは逃れることはできなかつた。

「いいや、これで終わりっつーのはまだ寂しいだろ？ もう少し楽しもうぜー」

しかし今までの焦燥は演技だったかのように、アラタは手札から1枚のカードを抜き取り、掲げる。

「マジックのマジックカードか……流石にしぶといな」

「おつよー！ フラッシュユタイミングで【ホーリーエリクサー】を使用！  
「コストは全て龍の霸王から確保！ よってレベル3にダウン！」

薬師寺アラタ

「Life」1

「Hand」2 1

h 3 6  
「Core」Reserve 1 Field 10 7 Trash

尚も月光神龍が近づく中、アラタのライフカウンターが白い輝きを放ち始めた。まるで空洞のライフを埋めるかのごとくその白い光は渦を巻く。

「!!」

そしてあるはずがなかったライフがひとつそこに蘇った。

薬師寺アラタ

「Life」1 2

6  
「Core」Reserve 1 0 Field 7 Trash

「これで準備は万端！ 月光神龍の攻撃はライフで受けるぜ！」

アラタの眼前に片腕の爪を尖らせ飛翔する月光神龍。

バキバキと関節を鳴らし、アラタの前に展開されたバリアを十字に切り裂いた。

薬師寺アラタ

「Life」2 1

6  
「Core」Reserve 0 1 Field 7 Trash

「くっ……っ！」

「さらに！ ライフ減少により俺のバーストが発動するぜ！！」

「おおっ!? ここに来てバースト!? しかもライフ減少時の！」

興奮のあまり鉢巻を何度も締め直すハジメ。それに釣られて周りにいた子供たちも驚きの歓声を上げる。

「チャンピオンは、こうなることを見越していたな」

「ああ、相手がアタックしてくるとわかっていたからこそ、残りライフ1の状態で【ライフ減少後】が条件のバーストをセットした。悔しいが、俺では思いつきそうにない発想だ」

テガマルに答えるように、スケッチブックに鉛筆を走らせるチヒロはそんなことを呟いた。

（ここに来てライフ減少が条件のバーストだと……いったい何だ……？）

バローネの渦巻く思考に、あの時の光景が蘇る。

（まさか ！！）

雷鳴が響き渡った。

浮き出た暗雲からこぼれ落ちるその音は、何度も空気を反響させ、鼓動すらも早めさせる。



「悪いね。また同じパターンであんたの“友”を破壊しちまってさ」  
どす黒い雲から放たれたのは炎の渦。勢い良く回転し月光神龍へと突き進む。

月光神龍はその強襲をすんでのところで回避した。

「ライフ減少によりバースト発動！ 古《いにしえ》より蘇れ太古の龍！ 草薙の剣にて全てを薙ぎ払え!! 【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】を召喚!!」

飛来した炎の渦から現れたのは二体目の龍の霸王。そしてバローネの月光神龍は二体目の犠牲。

龍の霸王は月光神龍に跳びかかり炎剣を振るう。凄まじいスピードで振り払われたそれはまるで熱で空気さえ歪めているかのようだ。

「我が友よ……!!」

バローネの顔に悲痛の色が浮かぶ。またしても自分のミスで“友”が破壊されるのを指を加えて見てることしかできないのだから。

月光神龍は上空へと飛び、その一撃を何とかかわす。

だが龍の霸王はそれよりも早い反応速度で月光神龍の後ろへと回りこみ、背中のスラスタールごと月光神龍の腹部を突き刺した。

「これが龍の霸王のバースト効果、BP15000以下のスピリットの破壊だ！」

とどめを刺すようにと、拳を前につきだしたアラタ。

命に従うべく、龍の霸王は炎剣の質力を最大に釣り上げる。

ゴオオオオオ!!!

月光神龍は内部から焼きつくされ、全身に炎が燃え移る。  
腕が、足が、胴体が、頭部が。次々と爆発していった。

「許せ……俺の不注意のせいで、お前」を二度も破壊されること  
なつた……」

龍の霸王は月光神龍から剣を引き抜くが、念には念を入れるよう、  
何度も何度もその燃える残骸を切りつけた。

「だが」

バローネは顔を上に上げ、月光神龍の最後を看取る。

最後に龍の霸王が振り払った一閃により完璧に月光神龍は崩壊し、  
爆発とともに消えていった。

月光のバローネ

[Hand] 0

[Core] Reserve 0 5 Field 1 1 6 Tr

ash 2

「お前の破壊は無駄にはしない」!!

ブウンとバローネのバーストゾーンが光り輝き、1枚のカードを弾  
きだす。

「スピリットの破壊によりバースト発動!!」

バローネはそれを掴みとり、前に突きつける。

「マジックー！【クヴェルドウルヴ】!!」

クヴェルドウルヴ

【バースト・相手による自分のスピリット破壊後】

自分のトラッシュにあるブレイヴカード1枚を手札に戻す。

その後コストを支払うことで、このカードのフラッシュ効果を発揮する。

フラッシュ:

自分の手札にある赤/緑/白のブレイヴカード1枚を、コストを支払わずに召喚する。

「バースト効果でトラッシュにある【コテツ・ティーガー】を手札に加える。そしてフラッシュ効果で【コテツ・ティーガー】をノーコストで召喚！」

[Hand] 1 0

[Core] Reserve 5 1 Field 6 7 Tra  
sh 2 5

[Burst] ??? なし

絶望壁の要塞の頂上からほぼ垂直な壁を駆け下ってくる者がいた。黒い艶を持つ甲冑を身にまとい、背中には巨大な日本刀が担がれている。

主《スピリット》を失った今、彼と合体《ブレイヴ》出来るものは誰一人としていない。だが彼は駆ける、最期まで戦い抜く、その意思を強く待って。

タン、とスピリット状態のアーケランサーの横に立ったのは一匹の虎。

そう、紛れも無い【コテツ・ティーガー】だった。

「ターン……エンドだ」

[EndStep]

月光のバローネ

[Life] 1

[Hand] 0

[Core] Reserve 1 Field 7 Trash 5

[Spirit] 【突機竜アーケランサー】 【ザニーガン】 【コテツ・  
ティージャー】

[Nexus] 【光の聖剣】 【絶望壁の要塞】

[Burst] なし

### 【第12ターン】

[Start&Core&DrawStep]

薬師寺アラタ

[Life] 1

[Hand] 1 2

[Core] Reserve 1 2 8 Field 7 Tra  
sh 6 0

[Spirit] 【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】 【龍の霸王ジーク・  
ヤママト・フリード】 【剣馬グラニム】

[Burst] なし

[Nexus] なし

[MainStep]

「おっ……？」

アラタの引いたカード。

それは3枚目の龍の霸王だった。

今回は付いているのか、それとも龍の霸王が自分に出せと呼びかけているのかはわからない。

「俺も今回ばっかしは本気で行かせてもらっぜっ！ 3体目の【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】を召喚する!!」

だが引いたカードには全て全力で応えるのがアラタの信念。

Core Reserve 8 3 Field 7 8  
Trash 4

二体の龍の霸王の間に最後の龍の霸王が降臨する。  
その光景はもはや地獄に近い絶望を与えるには十分すぎた。

「龍の霸王二体をレベル2に！ もう一体の龍の霸王はレベル3に！  
不足コストは剣馬グラニムから使用する！ よってグラニムは破壊される！」

Core Reserve 3 0 Field 8 12  
Trash 4

三体の龍の咆哮がフィールドに共鳴した。

ビリビリと空気を震撼させるその相貌《すがた》は、身体を握りつぶし、圧迫するかのよう。

「ま、ライフが1の状態じゃつかつには動けないな。あんたらのブレイヴには装甲もついてることだし、BP参照の破壊もできないしね」

バローネはその言葉にハツとして、周りに張り巡らされている【絶望壁の要塞】に目をやる。

苦し紛れにレベル2で設置したことがここで功をしたということか。

### 絶望壁の要塞

LV2

自分のスピリット状態のブレイヴすべてに“【装甲・赤ノ青】このスピリットは、相手の赤ノ青のスピリットノネクサスノマジックの効果を受けない”という効果を与える。

これによりバローネのフィールドにいる【コテツ・ティージャー】【突機竜アーケランサー】には装甲赤青がつき、【ザニーガン】は元々が持つ重装甲赤により龍の霸王の効果を防げるといっわけである。

「ターンエンド。次のターンで決めるぜ?」

[Endstep]

### 薬師寺アラタ

[Life] 1

[Hand] 1

[Core] Reserve 0 Field 11 Trash 4

[Spirit] 【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】 × 3

[Burst] なし

[Nexus] なし

### 【第13ターン】

「スタートステップ……」

宣言とともに、一度ディスプレイが光る。

コアステップを終えた後はドローステップだが、バローネはこの次

に何のカードが来るか予想すら出来なかった。

アラタのように2枚目の“友”を引けるか、それとも引けずに負けるか。

いや……例えば2枚目を引いたって、龍の霸王3体というこの状況をひっくり返せるはずがない。

「く……」

フィールドに目をやると眼前には龍の霸王3体が刃を研ぎ、今か今かと待っていた。そこまでもあいつらは自分のライフの破壊が楽しみなのだろうか。

デッキの上に手を置く。

「この1枚で全てが決まるか……面白い」

バローネは一枚のカードを素早く抜き取り、確認した。

「バローネさん、一体何を引いたんだ!？」

ハジメは身を乗り出し、食いつくようにモニターのすぐ隣まで近づく。

明らかなバローネの表情の変化。

それはまったく予想外の事態に驚いているのと、逆転の可能性を手に入れ、喜んでいるかのようにも見える。

「ここで龍の霸王3体という状況を逆転できるなんてことがあったら、それは大番狂わせだな」

腕組みをしたままテガマルがそんなことをつぶやくと、

「だが、あのバローネっていう人ならそれも可能な気がするんだ。……どうしてかわかんないけど何か俺はそんな気がする」

チヒロはスケッチブックに書き写すのをやめ、顔を上げた。

そこには龍の霸王や月光神龍が描かれている。

(何故……“このカード”が俺のデッキに……?)

バローネは引き当てたカードをしばらく凝視する。そのカードは先日の構築では入れてなかったはずのカード、白を得意とするバローネには縁のないカードとも言えた。

何故“このカード”が入っているのか、思い当たるとすれば

(そうか……あの時……)

「どうした、動きが固まっちゃってるぜバローネ？ もうこんなところで勝負を諦めたってわけじゃあないよな。たとえ負けが決まっているような展開でも、最期まで戦い通すのが一流のカードバトルというもんだろ！」

「フツ……随分と大した物言いだな。言っておくがこのバトル、俺は負けるとは思っていない。いや……」  
「うっ言つべきだな」

バローネは大きく息を吸って、アラタへと強い視線を向けた。

「俺はこのターンで貴様を倒すッ!!!」



そのキラキラとした眼差しは敵を威圧する孤高の狼のごとく威厳を放つ。

「へえ、それは楽しみだ！ 守り中心な白が攻めでこの壁をどう崩すか。見させてもらおうぜっ!!」

バローネの掴む最後のカードが太陽のごとく炎を纏う。

「銀河の中心に君臨する最大の星座よ、神々《こつこつ》《しき弓》を持って、炎角なる矢をつがえよ！」

それをディスプレイに叩きつけると、バトルフィールドの奥に巖山《がんばん》のごとき地表があらわになった。

そこには射手座の文様が浮かび上がり、朱《あか》き閃光が走る。

「【光龍騎神サジツト・アポロドラゴン】をレベル3で召喚！ 不足コストは【ザニガン】【絶望壁の要塞】から使用する!!」

Core Reserve 7 0 Field 7 Trash  
0 7

光が集約し、ケンタウルスを模した龍が駆けてくる。

彼はバローネの背後で跳躍し、砂埃を巻き上げながらフィールドに到着した。

ユニコーンの白き四肢と、太陽のごとく燃え上がる龍。その二つを掛け合わせた姿は誰が見ても射手座ということがわかる。

「これは驚いた……。まさか赤のスピリット……。しかもXレアをこの

局面で引き当てるなんて……」

あんぐりと口を開けたままアラタは呆然と立ち尽くす。

今まで、白一辺倒で攻めてきた相手がいきなりまったくベクトルの違う強さを持つカードを出してきたのだからそれもいかしかたない。

「行くぞ、光龍騎神に【コテツ・ティーガー】と【突起竜アーケランサー】をダブルブレイヴ！」

コテツ・ティーガーが空中でバラバラになり、光龍騎神の白き四本の脚が漆黒の甲冑で覆われた。

尾前にはアーケランサーのバックパックが接続され、背中には鞘に収められた日本刀が背負《しょ》い込まれている。

光龍騎神は手に二本の鈍重な槍を握り、威嚇するかのように龍の霸王達へと突きつけた。

「Attack Step」

「これで決着を付けるか……！ 貫け！ ダブル合体《ブレイヴ》スピリット!!」

バローネが光龍騎神のカードを傾けると同時に、彼はアラタへ向かって駆けていく。

光龍騎神の咆哮がバトルフィールド全体に響き渡り、それに対抗するかのように三体の龍の霸王も雄叫びを奮わせる。

共鳴した四つの咆哮はバローネやアラタだけでなく観客全員のことを奮い立たせる。

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ という勇ましい足音をたて、光龍騎神は四本の脚でフィールドを駆け抜けていった。

まず彼の前に立ちふさがった者は前方にいた2体の龍の霸王。

片手ずつで1体を相手取るように、光龍騎神はアーケランサー一対の槍をそれぞれの龍の霸王目掛けて振り払った。

ガギイイインツ!!!

剣《つるぎ》と槍が二重に交差し、火花を散らす。

左手で振るわれた槍を龍の霸王が、右手で振るわれた槍をもう一体の龍の霸王が食い止めていた。

二体一の場合、やはり不利になるの一方。

龍の霸王達の草薙の剣で光龍騎神は段々と押し返されていく。

「アタック時効果発動

しかし、そこで終わりではない。

バローネの宣言と同時に、光龍騎神の内から眩ゆい光が辺りを照らした。

その光はアーケランサーの槍を通して2体の草薙の剣をドンドンと風化させる。

バキッ、バキッ、という鈍い音をあげて草薙の剣にはほころびが生じ始める。

龍の霸王はこれ以上光龍騎神の突進を止められない。この圧倒的なまでの力を防ぐことはこれ以上叶わなかった。

バギンツ!!

ついに光龍騎神によって2体の龍の霸王の剣が真っ二つに砕かれた。

そしてその勢いを崩さないまま光龍騎神は龍の霸王達を一刀両断にする。

しかし、それは致命傷には成り得ず、龍の霸王はまだ破壊されていなかった。

「BP10000以下のスピリットを合体《ブレイブ》してる数だけ破壊する。よってBP10000以下のレベル2の龍の霸王を2体破壊だ」

【合体時】Lv3『このスピリットの合体アタック時』

このスピリットのブレイヴ1つにつき、BP10000以下の相手のスピリット1体を破壊する。

だが、バローネが放った言葉。

それが無慈悲な現実を龍の霸王達の胸につきつける。

否《いな》

貫いていた。

ザシユウウウツ!!

とどめを刺すかの如く、光龍騎神は2本の槍で、2体の龍の霸王を貫いた。

そしてそのままフィールドの端まで向かって走りだす。

ゴ……ゴ……ウゴオオオオ!!!!

2体の龍の霸王が同時に悲鳴を上げるが、光龍騎神は突き刺したまま走るのを止めない。

壁までの距離はあと数メートル。

そして

ドオオオオオオンッ  
!!!!!!

フィールド全体がグラグラと揺れた。

光龍騎神が突っ込んだ壁はほぼ半壊状態に等しく、粉々になったコンクリから粉がパラパラと舞い上がっていく。

そこには十字架に磔《はりつけ》にされたキリストのごとく、槍で貫かれた2体の龍の霸王が壁に固定され、力なくブランと垂れ下がっていた。

「そして、もう一つのアタック時効果。レベル3の【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】に指定アタック!!」

L V 1 ・ L V 2 ・ L V 3

系統：「光導」 / 「星魂」を持つ自分のスピリットすべては、アタックするとき相手のスピリット1体を指定し、そのスピリットにアタックできる

光龍騎神はギリリと眼光を尖らせ、最後の標的を見据える。

チャキ、と肩に背負っていた鞘から日本刀を抜き取って、最後の戦に備えるべく静かに刃を尖らせた。

「来るなら来い！ 俺の相棒がブロックするぜ!!」

対する最後の龍の霸王も、仲間をやられた怒りを燃やし、復讐の炎へと変える。

12宮の力を得し射手座の【光龍騎神サジット・アポロドラゴン】。霸王の力を得し、太古の【龍の霸王ジーク・ヤマト・フリード】。

最後の戦いの幕が切って降ろされた。

ゴオオオ!!

龍の霸王が口から直径5メートルにもなる炎の渦を光龍騎神目掛けて放つ。

光龍騎神はそれを日本刀で切り裂きながら突進する。

ザンツ!!

そしてある程度の距離を詰めると空気を一閃し、刀の先から衝撃波を放った。

その衝撃波は一直線に龍の霸王へと向かっていく。

龍の霸王は草薙の剣でそれを受け止め、右にいなす。

すると、そのまま光龍騎神へと向かって剣を振り払う。

刃には炎が宿り、綺麗な放物線を描いて光龍騎神の頭部へと迫っていった。

ガギイイイン!!

再び刃が鏝迫り合う。

力と力が真正面からぶつかり合い、火花が散るフィールド全体にその熱気が反響した。

何度も何度も刃が交差し合い、互いに損傷を激しくする。

地上では不利だと判断した龍の霸王は、両翼の羽をはためかせ、空

中へと舞い上がった。

それを追うようにして、光龍騎神も取り付けられたアーケランサーのバーニアを展開する。

日本刀を両手で構え、一気に龍の霸王との距離を詰める光龍騎神。振り払った斬撃により龍の霸王の左手を切り裂いた。

だが

そこに出来た一瞬の隙を突いて、龍の霸王はコテツ・ティーガーの刀を弾き飛ばした。

遠く離れた地面に、落下した刀が突き刺さる。

丸腰状態の光龍騎神も、龍の霸王に腹部に蹴りを入れられ地面へと落下していった。

ズドオオン!!

砂煙を立てて墜落した光龍騎神。

その周囲には僅かなクレーターができていた。

「油断するな… 上だっ!!」

バローネの言葉を聞いて光龍騎神は上空を見上げる。

そこには刃を構え、急降下してこちらに向かってくる龍の霸王の姿があった。

もう龍の霸王はすぐそこまできている。

今から刀を取りに行く時間はない。ましてやこのクレーターから抜け出す時間さえも。

だから光龍騎神は“最後の武器”を使って迎撃することに決めた。

右手には竜神の弓が、左手には天馬の矢が現れ、それを強く握り締める。

ギリ……ギリ……ギリ

弓を90度に傾けて、今まさに迫り来る龍の霸王を狙って弦を絞った。矢の先と龍の霸王の間にはもはや数十センチしかない。

龍の霸王が先に斬撃を加えるか、光龍騎神が先に矢を射るか

バシユウウウン!!

速度で勝ったのは光龍騎神だった。

一筋の閃光が天高く登った。

それは光龍騎神が放った光の矢。龍の霸王の腹部を貫いた輝かしく天馬の矢だった。

ドオオオオオオンツ!!

龍の霸王が爆発し、大きな爆炎が発生する。

そんな中、光龍騎神は最後の場所へと向かう。弓を剣へと変形させ、向かった先は薬師寺アラタの眼前。

「【コテツ・ティージャー】の効果発動。お前の最後のライフをいただくぞ」

【合体時】『このスピリットのバトル時』

BPを比べ相手のスピリットだけを破壊したとき、相手のライフのコア1個を相手のリザーブに置く。



「ははっ、」ここまでよかったな。……いいぜ、ライフで受ける」

アラタは今回の結果に少し残念そうな顔をしたが、その後すぐに笑みを作りなおした。

こうして、バローネと出会えたこと。今までにない熱いバトルを繰り広げられたこと。そして、久々の負けを味あわせてくれたこと。

これら全てに感謝するように、アラタは笑った。

その表情には一点の曇もない。

光龍騎神は天高く剣を掲げ、そのまま斜めに両断する。

赤いバリアが砕け散り、破片とともに暴風を起こす。

その勢いで、アラタもまた宙へと投げ出された。

「いやー負けちった負けちった」

バトルフィールドから帰ってきたかアラタは照れ恥ずかしそうに子供たちの前で頭をかいていていた。

世界チャンピオンとして知られてる自分が無名のカードバトルに負けてしまったことにより、大方面目丸潰れといったところだろうか。

「えーっ!! まさかチャンピオンが負けるなんて!! チャンピオンを倒すのは俺が一番最初って決めてたのにー!!」

その中でもハジメはとことん悔しいようで、いつも以上に騒がしい。

「……俺が勝てたのはマグレだ。たまたま入っていたカードが、たまたまそのときに引けただけの話。本来ならば九分九厘の確率でお前が勝っていたはずだぞ？」 薬師寺アラタ

バローネはカードで髪をとかしながら自己の功績を謙遜する。

そう、今回勝てたのは紛れもなく【光龍騎神サジツト・アポロドラゴン】のお陰。

自分のキースピリットでもなければ、デッキの構築に寄るものでもない。

ただ単にカード単体のパワーで押し切っただけだ。

「そう言うなって、運も実力の内！ アンタは普通に俺に勝ったことを誇っていいぜ！」

だが、アラタはそれを否定するようにそう言った。

月並みな言葉だが、たしかにそれも悪くない。

「では……この事実ありがたく頂戴しておこう」

「ああ、それと」

アラタが言いかけた途端。

「こちらですかー！?! あの世界チャンピオンが負けたというショップは!!」

バトスピショップの駐車場に【バトスピニュース】と書かれた車が何台も入ってきた。

【バトスピニュース】といったら新弾ブラスターの情報から、世界のバトスピ情報など幅広い範囲でバトスピに関する情報をお届けする国民的支持の高いニュース番組。



「やれやれ……面倒な事となった」

バローネは走りながらやや呆れ気味に呟く。

「ははっ。だけどバローネ、あんた顔では笑ってるぞ」

「……」

アラタに指摘されてバローネ口元に手を当ててみると、ほんの僅かだが確かに笑みを浮かべていることが確認できた。

なんだかねで、バローネはこの状況も、この世界も楽しんでるのだ。

「まあ……退屈はさせないな」

二人の男が昼下がりの街を駆ける。

この世界に来てしまった者、この世界で頂点に立つ者。境遇は違えど、内に秘めるものは同じ。

それはバトルスピリッツを心から愛するという感情だった。

## Core 月は常にそこにある

「おっしゃー!! 今日も上げてくぜッー!!」

バローネと世界チャンピオンの戦いから数週間。

ミカの経営するバトスピショップは一躍有名となり、これまでになり大盛況となっていた。

「おっ……ハチマキ。来たのか」

ハジメはそんな人ばかりで混み合っている店内に入ると、一人の少年に話しかけられた。

抑揚のない声と目元まで深くかぶったキャップ。  
手にはスケッチブックと鉛筆が握られている。

「おおー！ チヒロじゃん！ テガマル達は!?!」

その少年の名は日下チヒロ。ここら一带で名の通った『テガマル組』の一人だ。

いつもならばその名の通りテガマルと行動しているのだが今日に限っては一人きりだった。

「あいつらは、なんか用事があつて来れないだとさ」

「ふ〜ん。じゃあチヒロはなんか用事か？」

「まあ……な。でも無駄足だったみたいだ」

そう呟くとチヒロは視線を下へと落とす。

何やら残念そうな面持ちで床を見つめるその表情はどこか哀愁を

漂わせる。

ハジメはそんなチヒロを見て少しやり辛さを感じると話題を逸らした。

「そ、そういえばさ！ 今日SBの日だけど、いつもとは一味違ったものをやるようだぜ！ あの姉御のことだから何を考えてるのかな」  
「なんて……」

時刻は午後11時。

SBがそろそろ始まってもいい時間だ。

周りの者もそれを察しているのか、何やらピリピリしている。

今にも始まる激戦に備えて、相手を品定めするかのようにギョロギョロと視線を泳がす輩もいる。

「さあな。俺、今日は大会に出る気分じゃないんだ。絵でも書きながらゆっくりと高みの見物でもしておくよ」

「えー!! 出ないのかよチヒロ！ そんなこと言わずにさあ」

他人事をまるで自分事のように駄々をこねるハジメ。

しかし一度言ったことは曲げないのがチヒロだった。

なのでどれだけハジメが言おうと彼の決心は変わらない。

そんな時。

「へー、それはいいこと聞いちゃったあ！」

ガシッ!!

突然二人は後ろから抱きつかれた。

ハジメとチヒロの首にかかっているのは白くてしなやかな女性の

腕。

ハジメは赤面しながら顔を後ろに向けて、

「あっ！ 姉御じゃん!!」

そこにはいつものようにピンクのEプロンを着たこのオーナー、  
如月ミカがいた。

「じんにちは、ハジメ君。今日のSB出てくんでしょ、今日の商品  
はすごいから期待しててね。」

「まじで!? うおおお！ 上がってきたああ!!」

「そしてチヒロ君」

「なんだ？」

「SB出ないんだったらお店の仕事手伝ってくれない？ お客様が  
多すぎて猫の手も借りたい状態なのよ。」

確かにバローネとミカしか働く者のいないこの店は客の比率が  
あっていない。

しかも今ここにいるのはミカだけ、バローネの姿はどこにも窺えな  
かった。

「あれ？ バローネさんはどうしたの？」

「……」

ハジメの追求にミカは言葉を詰まらせる。

まるで聞かれなくなかったことを聞かれたかのように、辛い表情を

して。

「俺もその『バローネ』っていう人に会いに来たんだ。同じ白使いとしても聞きたいことがあったからな」

チヒロもバローネの行方をミカに尋ねる。

だが、やはりミカは黙ったまま。

「そ、そんなことはいいから……早くしないとS B始まっちゃうよ？  
ほらほら急げ〜」

勢い良く立ち上がったミカ。その勢いで彼女のエプロンのポケットから一枚の紙が落ちた。

その紙をハジメが取ってみると、そこには達筆な字で2、3行の文が綴《つづ》られていた。

『俺はもう長くはない。だから最後は一人で静かに消えていきたい。  
探さないでくれ』

「じれって……!!」

「ミカさん……これはあの人が書いたものなんですか？」

ハジメとチヒロが形相を変えてミカに詰め寄る。

それを間近に目にし、これ以上誤魔化しが効かないと悟ったミカは、仕方がなく事情を説明し始めた。

「実はね、「ここ最近バローネの様子がおかしかったのよ。特に病気でもないのに、まるで何かの激痛に苦しむように何度も何度も呻き声を上げて……」



それを思い出すたびにミカ表情は悲痛に染まっていく。  
彼女が何を思い、何を感じ、何を求めバローネに接してきたかは十分にわかっている。

わかっているからこそハジメとチヒロはミカの決断に納得がいかなかった。

「なんで！　なんで諦めてるんだよ姉御！！　バローネさんは戻ってくる！　ただ、はしゃぎ過ぎた反動がここに来て出てきただけだろッ！」

「そうだ。あの人はそう簡単に消えるたまじゃない。ハチマキ、俺達で探しに行こう」

チヒロはキャップをかぶり直しハジメに視線を送る。

ハジメはそれに頷くと、

「姉御！　待ってるよ！　俺がバローネさんを連れ戻してくるから！」

チヒロとともに店から飛び出し、どこかへと走り去っていた。

ミカはそんな様子を呆然と眺めながら立ち尽くす。

「バカね……もう、遅いのに」

まるで何も知らない二人の子供を憐れむかのような視線を送りながら。

「うっ……ぐううう……」

体が軋む音が聞こえてくる。

一歩先に進むだけでも、関節部に激痛が走り、骨が、肉が、根こそぎ消滅していくかのような錯覚に囚われる。

「はぁ……はぁ……グッ!!」

今にも破裂しそうな心臓を抑えるようにして胸を掴む。

心拍数が異常なほど上昇していて、手にはその鼓動がビートを刻むように激しく伝わってきた。

バローネが今いるのは、この街の丘。

今年の夏に世界チャンピオンを決める特設フィールドが一望できる見晴らしの良い場所だった。

『苦しいか、月光の覇者よ』

バローネの頭に貫禄のある男の声が聞こえてきた。

バローネが体調を悪くしてから、何度も何度も聞こえてくるこの声。

それは魔族の間では誰もが忘れなもしかった一人の人間の声だった。

「……否定はしない。だが、これも仕方ないんだろ……」異界王」？」

顔面までも蒼白なバローネは近くのベンチに腰を降ろし、この街の景色をゆっくりと見渡す。

『ああ、そつだ。月光のバローネ。貴様は神々の砲台から発射されたあと、マザーコアの力によりこの世界へと移された。しかし、それはただの延命措置でしかなかったということだ』

「別の世界から来た俺を、この世界が拒んでいる。今まさに俺というシミを洗い流そうと躍起になっているわけか」

ゼエゼエと呼吸を荒げ、バローネは笑った。

この世界が真っ黒なインクが入った瓶で、バローネが一滴の白いインクだとする。

一滴の白いインクがその瓶に落とされたとしたら、それは瞬間に黒一色に染め上げられてしまう。

まるでその存在そのものが無かったかのように、消されてしまうのだ。

『貴様は今までマザーコアの力によりこの世界で存命できていた。だが、その力も薄れてきている。』

もってあと数時間といったところだろう』

「……もとより、俺はあそこで消えるはずだったんだ。これだけの猶予が与えられただけ……満足さ」

多少の未練はあっても悔いは一切なかった。

バトルスピリッツを通じ、こうして様々な人間やカードに出会えたこと。

負けを知り、勝ちを知り、そして仲間の大切さも改めて確認できた。これ以上なにを望もうというのか。

「最後に問う。異界王」

『なんだ、バローネよ』

「お前は何故俺に話しかけられている？ お前もこじとは別の世界の

人間だろっに」

『そんなくだらんことか』

異界王はバローネの質問を軽く鼻で笑って、

『私は全知全能の神ともいえる存在となった。例え肉体が朽ちようとも、魂はあり続ける。次元を超え、別の世界までも把握できる魂へと昇華したのだよ』

「まさに化け物だな。さすがは俺達魔族を支配していただけある……」

それからは会話は続かなかった。もう語りたいたことは全て語り尽くしたのか、相手が異界王だからなのかはわからない。

バローネは自分の身体が徐々に透け始めていることに気づく。自身の身体だけではなく、身に着けている服、腰に掛けたデッキケースまでもが。

「俺が関わった物も、証拠を残さないために消すというわけか……この世界はどうも几帳面でいけない」

透けるデッキケースからカードを取り出してみると、同じようにカードもその存在が消えかかっていた。

せつかくこの世界で集めたカードが消えて行く事にバローネは少し苦しむ。

「だが、これも定め……甘んじて受け入れよう」

バローネはここからの景色をベンチに腰掛けながらじつくりと眺めた。

近くには海もあり、波が押し寄せては引いていく音が聞こえ、潮の香りが微かに鼻孔をくすぐった。

この街にこれて本当に良かった。

未来のように荒廃したところではなく、自然が豊かで、穏やかな空気が包むこの街に。

そんな時、二人分の足音がこちらに向かってくる音が聞こえた。

その音は段々と大きくなっていき、バローネのすぐ隣まで来ると、その音はピタリと止まる。

バローネはまだ海のほうを眺めたまま、こつ口にした。

「何か用か。お前ら」

「バローネさん!! 何やってんだよ!!」

二人のうち、赤い鉢巻をつけた少年が叫んだ。

そう、バローネを探し、ここまで来たのは陽昇ハジメと日下チヒロだった。

「何……と言われてもな。見ての通り俺は何もせず、ただ黄昏れているだけだが……?」

バローネは目の前の少年たちに何から話そうか迷った。

ミカには自分がこの世界の住人ではないこと、そしてそのせいで自分が消える定めにあることを話した。

しかし、それと全く同じ事をこの少年たちに話すのは酷なことだし、何より残された時間はあとわずかなのだから、無駄に浪費したく

ない。

「なんで……あんた体が、透けてるんだ……？」

大きく目を見開いて、チヒロが呟く。

その言葉で気づかされたハジメも目の前の異常な光景に息を呑んだ。

「時間が惜しい……端的に説明する」

バローネは体中に駆け巡る激痛を堪えながら二人の方を向きこれだけを口から言い放った。

「俺はあと数時間でこの世界から消えてなくなる。お前らの中にある俺の記憶と一緒にな」

「嘘だろ……!？」

「なんだよそれ!! バローネさんが消えて、俺達もバローネさんのこと忘れちまうってのかよ!」

バローネは否定も肯定もせずに静かに目を閉じた。

段々と痛みが薄れてきたのがわかる。もうこれは自分の迎えが到着したのだらう。

「バローネさん!! あんたはチャンピオンにも勝ったんだろ!? じゃあ俺にリベンジしなくてもいいのかよ!? 負けたまま消えて行くなんて満足できんのかよ!!」

「俺はアンタに教わりたことが多くある。同じ白使いとしてデッキの組み方や、ゲームの進め方……だからそんな早くにいなくなるよ

……」

ハジメの目には涙すら浮かんでいた。

それを必死にこらえようと唇を噛み締める姿が、ひたすらに悲しみを物語っている。

「俺……さ。新しい相棒を手に入れたんだ。

ロード・ドラゴン・バゼルっていう……これでまたバローネさんとバトリたい！ だから……!!」

「フツ……残念だが、それは叶いそうにないな……。見る、俺が消える前に俺のカードが消えてしまった。残っているのは……またこの2枚だけだ」

バローネが見せてきたのは月光龍と月光神龍。

それもタワーで当てたものではなく、この世界に来た時についてきてくれた2枚の友だった。

「だったら、俺のを使ってくれ。同じ白だから使いやすいはずだ」

チヒロが自分のデッキケースをバローネに手渡す。

「執念深いな……いい加減休ませてくれてもいいというのに……」

バローネはチヒロのデッキに月光龍と月光神龍のカードを組み込み、仕方なしに立ち上がる。

何故この少年はここまで自分に固執するのか。

どうせ自分が消えたらここで戦った記憶もなくなるというのに。

「だが」

消えるとわかって、何故求める。何を求める。  
失うとわかって、なぜ得ようとする。

自分は最後に何を思い、何を感じ、何をしようとしている。

「挑まれた戦いには全てバトルスピリッツで応える。それがこの俺、月光のバローネだ。最後の戦い……存分に楽しませてくれよ？ 少年」

「おう！ 俺は、チャンピオンを超えたアンタを倒して、霸王《ヒーロー》になる！」

「そうか、ならば行くぞ。ゲートオープン……」

「界放!!」

バトルが開始されてもう何ターンが経過しただろうか。

バローネは朦朧とした意識の中でカードとコアをひたすらに動かしていた。

バローネのライフは2。ハジメのライフは1。

こんな状態で、さらには自分のデッキでもないというのにバローネは確実にハジメを押ししていた。

「スタート……ステップ」

ギン、とディスプレイの外枠から光が漏れる。  
フィールドには月光神龍と月光龍の2体。



最期にこの2体をフィールドの引っ張り出させてバローネはどこか満足しながらバトルを進める。

「メインステップ……」

バローネは自分の手札に目をやる。

チヒロのデッキはバーストが中心に組まれていて、ブレイヴは殆ど無い。

2体の龍にブレイヴを与えてやることすらままならないのが現状だった。

「バーストをセット」

ブレイヴを出すことはできないが、そのかわりバーストなら豊富に存在する。バローネは最後の賭けに一枚のカードを伏せた。

「さあ、バローネさん！ いつでもかかってこいよ！ 俺のロードドラゴンが相手になるぜ！」

ハジメのフィールドのは英雄龍と爆炎の霸王がそれぞれレベル3で待ち構えている。合体していない月光神龍ではバゼルのBPには敵わない。

「エンドステップだ、少年」

バローネはこのターン動かなかった。

それはまるで、赤なら赤らしく自分から仕掛けてこいと言ってるかのようだった。

「おっしやああああ!! 上げてくぜえええ!!」

鉢巻を締め直し、ハジメは自分に活を入れるかのごとく大きく叫んだ。

これが最後、本当に最後のチャンスなのだ。

だからこそ勝つ。バローネが消えても、リベンジしに再びこの世界へ戻ってくるのに期待してるから、自分は勝たなければならない。

「バーストをセット！　そして、アタックステップ！」

ハジメは自分の前に立つ英雄龍の背中をじっと眺め、何かを託すように、

「行っていい!!　英雄龍ロード・ドラゴン!!」

「来るか……月光龍ストライク・ジークヴルムでブロック!!」

円形のフィールドの中心で英雄と月が衝突する。

ハジメと最初に戦ったときは互いに直接刃を混じ合わせることはなかった2体。

その2体はこうしてやりあえることを楽しんでいるかのように宙を舞った。

「フラッシュタイミング！」

その激闘をハジメが遮る様に口を開いた。

手に、一枚のマジックカードが握りながら。

「マジック、五輪転生炎を使用！　【系統・戦竜】を指定し、バゼルとロードドラゴンのBPPを+4000!!」

【五輪転生炎】

フラッシュ・系統1つを指定する。このターンの間、合体していな

い指定した系統を持つ自分のスピリットすべてをBP+4000する。

「我が友のBPを上回ったか……！」

月光龍は合体していないのでBPは10000のまま。対して英雄龍は今のマジックによりBPが4000上昇したので13000となった。

英雄龍は刀を抜き天にかざす。

するとそこには空気を圧縮するかのように空間を捻じ曲げる炎が発生した。

それにすらも怖気づくこと無く月光龍は両爪に紫電を纏わせ、英雄龍へと突進してくる。

ガギン!!

両者は再び空中で激突し、爪と刀が交錯する甲高い金属音が鳴り響いた。

刀と爪が命の応酬を繰り返す。

しかしリーチの関係上、爪では不利。英雄龍の刀の一撃を回避できず、月光龍の翼が斜めに切り落とされ空中から落下する。

それを追うようにして英雄龍も地面へと舞い戻った。

「!!」

その瞬間に英雄龍のハチマキがハラリと落ちる。

英雄龍も無傷というわけではなかった。

額には三つの閃光が走っていて、右目ごとハチマキが切り裂かれている。

そして腹部には深々と牙によって付けられた傷までもあった。

お互い満身創痍のこの状態。

英雄龍は刀を構え直し、月光龍は傷だらけの身体に鞭を入れて起き上がった。

四本の足で地を踏み、まるで肉食獣のような唸り声を上げて駆け出してくる月光龍。

それをじっと見つめ、英雄龍はまだ生きてる左目も閉じた。

音だけに集中する。他の情報は何もいらぬ。ただ感じ、思ったところに刃を重ねれば

ザンツ!!

一閃。

月光龍の牙が英雄龍に届く前にその一撃が走った。音速をも超える速度で薙ぎ払われた刀は月光龍の硬質なボディすらたやすく切り裂き、その地へと屈服させる。

動かなくなった月光龍。それを吊つかのように英雄龍は刀を地面へと突き立てその場を去った。

刀とともに残された月光龍は最後に顔を動かし、今まさに消えかかっている自分と重ねてバローネのほうへと向いた。

紫のバイザー越しに点滅するツインアイ。それが何を伝えようとしているのかはバローネには痛いほどわかった。

「ああ……俺もすぐそこに行く。だから……先に行って休んでくれ」

直後。

月光龍の体が辺り一帯を飲み込む炎に包まれる。その爆炎は徐々に肥大化し、英雄龍の残した刀もろとも月光龍を消し去った。

「俺のスピリット破壊によりバースト発動」

月光龍は最後に残してくれたもの。それはバーストのトリガーであり、月光神龍への贈り物。

「ブレイヴ【オーセベリング】をバースト召喚、そして月光神龍へと直接合体！」

そう、このバーストが主軸のデッキに唯一入っていたブレイヴカード。

バーストブレイヴだった。

鈍い鋼色をしたブレイヴはその両手に持つハンドガンを放り投げ、月光神龍へとつかませる。

そして下腹部のスラスターがパージされ、月光神龍のバックパッカーとなった。

月光神龍の能力である【重装甲・可変】は合体してるブレイヴにより、体色が変化する。

今回のブレイヴは白なので体色に変化は現れないはずなのだが

「美しい」

ふらつく身体を感動に震わせ、揺れる視界をしっかりと固定し、バローネを見た。

目の前でセラミックのような眩しい銀色に変わり、深夜の月の如く凜々しくフィールドを照らす月光神龍を。

「ようやくいつものバローネさんに戻ってきたみたいだな！ けど俺のアタックステップはまだ終わりじゃない！」

ハジメは、疲労し膝をついている英雄龍にお礼を言って、

「次頼んだぜ！ 爆炎の霸王ロード・ドラゴン・バゼル！」

英雄龍よりも一回り大きい爆炎の霸王が鮮やかな翼を広げバローネへと飛翔した。

「そしてアタック時効果でバーストがオープンされる！」

【爆炎の霸王ロード・ドラゴン・バゼル】

LV2・LV3『このスピリットのアタック時』

自分のバースト1つをオープンできる。そのカードのバースト条件が

【相手の『このスピリットノブレイヴの召喚時』発揮後】のとき発動させる。

他のバースト条件のときはデッキの下に戻す。

LV3『自分のバースト発動後』

このスピリットは回復する。

「オープンしたバーストは【爆覇炎神剣】！ なのでこれを発揮し、バゼルは回復だあ！」

【爆覇炎神剣】

【バースト・相手の『このスピリットノブレイヴの召喚時』発揮後】

自分はデッキから1枚ドローし、BP6000以下の相手のスピリット1体を破壊する。

その後コストを支払うことで、このカードのフラッシュ効果を発揮する。

フラッシュ…このターンの間、系統「覇皇」を持つ自分のスピリッ

ト1体に

”『このスピリットのアタック時』BPを比べ相手のスピリットだけを破壊したとき、

このスピリットが持つシンボルと同じ数、相手のライフのコアを相手のリザーブに置く”を与える。

「ライフで受ける……！」

爆炎の霸王は黒煙の炎をバローネに向けて吐き出す。  
赤き障壁はその炎を受け、バローネに何度も衝撃を伝えた。

「これでお互いに最後のライフか……」

「ああ！　そして俺がバローネさんの最後のライフを貰い受けるぜ！  
バゼル！　もう一度アタックだ！」

両腕に二本の刀を構え、爆炎の霸王は再び空をかける。  
バローネにライフで受ける選択肢は残されていない。ならもはや  
月光神龍でブロックするしかなかった。

「我が友よ……これが最後の命令だ……聞き入れてくれるな？」

今にも消えてしまいそうなバローネの囁きにも月光神龍は反応しない。

否……反応する必要がないのだ。

これまで激闘を勝ち抜いてきたパーティー的存在だというのに、  
今更さらそんな確認は水臭いだけなのだから。

「言わずもがな……と言ったところか。なら友よ、お前に最後の命を下す」

浅く息を吸う。

僅かな空気が喉を通して体全体に伝わり、バローネに最後の力を与えた。

「爆炎の霸王の攻撃をブロックしろ!! 月光神龍!!」

バローネの命令が降りた瞬間、月光神龍は両手に持っていたハンドガンを宙に放り投げ何回か回転させる。

それをガンマンのようにキャッチすると、早速狙いをすまし、弾丸を放った。

乾いた銃声が聞こえてきたと同時に、爆炎の霸王に4つの鉛の弾が襲い掛かる。

だが爆炎の霸王は訳もなく、それらすべてを刀で切り捨て、さらに距離を狭めてきた。

2刀流対2丁拳銃。

実際ならば圧倒的に拳銃の方が有利だ。しかしそれは飽くまで人間の場合。

これは人知をこえたスピリット同士の対決、そこに常識なんて介在しない。

ダンダンダン!!

銃声を響かせながら牽制する月光神龍。

しかしただこうして弾丸を撃っていてもすべて回避されて勝負は決まらない。

それを察して彼はある賭けにでることにした。

ゴオオ!!

今まで距離をはなして牽制していた月光神龍が急に爆炎の霸王に



接近してきた。オーセベリングのスラスタの補助もあり、その速度は計り知れない。

だがそれに焦りを示した様子もなく爆炎の霸王は迎撃のため刀を構える。

そして2体の距離が5メートル、3メートル、1メートルと縮まっていた。

そのあいだもひっきりなしに月光神龍は銃の引き金を引く。かわされるのはわかっていた。

しかしこれは近づくのを少しでも容易にさせるための手段なのだ。

ガギイン!!

宙を舞う一つの物体があった。

それはハンドガンが握られた月光神龍の機械の腕。

爆炎の霸王が振るった左手の刀が月光神龍の腕を仕留めたのだ。なら右手の刀は何を仕留めたのかというと……

それもまた月光神龍の手だった。

正確に言えば仕留めたのではない、仕留められていたのだが。

そう。

「英雄の剣、砕け合体スピリット」

バギイン!!

刀がたった一本の腕で白刃取りされ、そのまま砕かれたのだ。

金属の破片が宙に踊る。あちこちの光が反射して移し出すのは2体の表情。

あっけにとられることもなく、左手の刀で爆炎の霸王は横に薙いだ。

それをヒョイと回避すると、月光神龍はまたハンドガンを握り、弾丸を連続して放つ。

しかも今回はただの弾丸ではない。月光神龍自身が発する紫電を纏わせ、加速させた弾丸だった。

先ほどとは段違いな加速により、回避パターンが乱された。

爆炎の霸王はその弾丸をモロに受け、わずかながら怯む。

その隙を見逃さず月光神龍は何度も弾丸を浴びせた。

そしてハンドガンの弾丸が尽きると、最後は口でとどめを刺すため一気にポロポロになった爆炎の霸王へと飛び込んでいく。

ズザザアア!!

爆炎の霸王が地面に叩きつけられ、擦れる音が聞こえてきた。月光神龍はその上に覆いかぶさるように倒れ込んでいる。

両者ともしばらく動かない。

弾丸に体中を貫かれた爆炎の霸王はともかくとしてそれに追撃を掛けた月光神龍までもが動かない。

その理由はすぐにわかった。

月光神龍の背中から刀が突き出していた。

そう、飛びかかってきた瞬間に爆炎の霸王は月光神龍の腹部へと刀を突き立てていたのだ。

月光神龍の瞳が光を失い、手足がダランと垂れ下がる。

その直後に大きな爆発があった。

フィールド全体に広がっていく爆炎。全てを飲み込みまんとする爆撃。

「我が友よ……」

その爆炎の中でバローネに向かって進む影があった。それはすでに満身創痕の爆炎の霸王。

もげた翼を携え、なおかつ左足を引きずっている。その姿はちよつとした風が吹けばロウソクに灯されている火のように、あっさりと消えてしまいそうに弱々しい。

しかしその瞳だけは未だ業火の如く燃え盛っていた。

「爆覇炎神剣の効果が発動、BPを比べて月光神龍を破壊したので、バゼルのシンボルと同じ数だけライフのコアをリザーブに！」

#### 【爆覇炎神剣】

フラッシュ：「このターンの間、系統「覇皇」を持つ自分のスピリット1体に

”『このスピリットのアタック時』BPを比べ相手のスピリットだけを破壊したとき、

このスピリットが持つシンボルと同じ数、相手のライフのコアを相手のリザーブに置く”を与える。

爆炎の霸王が刀をバローネに突き立てる。いつでもライフを削り取れると言わんばかりに。

「フッ……やはり陽昇ハジメ。お前には敵わなかったということか……」

「バローネさん……」

バローネは顔を上げ、清々しい表情でハジメの方を向く。

「最後に頼みがある。聞いてくれないか？」

「なん……ですか」

「我が友、月光神龍と月光龍がもしこのままこの世界に残ったとしたら、お前が引き取ってくれ。どうも、こいつらだけ消えるような予兆がないんでな」

ハジメは涙をこらえて頷いた。

それを確認したバローネは遠い目をしてフツと笑う。

「さあ……来い、爆炎より生まれし炎の龍よ。俺の最後のライフ……  
くれてやる」

爆炎の霸王の咆哮が刀が振り払われると同時に響いた。

それは嫌なものではなく、どこか自分を送り出してくれるための励ましの声にも聞こえる。

「ありがとございしました。いいバトルでした。……だろ？ こういうバトルの後に残す言葉は」

胸のライフが光り輝きその役目を終えようとしていた。

周囲には真っ白な空間が広がり、バローネを包み込む。

あの時と同じだ。

神々の砲台から引き金となり消えていった時と。

どこか温かい、そして懐かしい感覚へと沈み、バローネの意識もまたそこで消滅していった。

「あら〜ハジメ君今きたの？ 残念だけどSBはもう終わったわよ

「？」

「おお、姉御。俺って今日ここに来るの二回目のような気がすんだけど、気のせいかな？」

「当たり前でしょ？ 何言ってるのよ〜まったく」

「そうか、そうだな！ なんかそんな気がしたけど気のせいだよな！」

ハジメはSBが終わり閑散としているショップ内に入ろうとする。だが何かぼうつとしていて、足をすくわれ、大きくずっこけた。

その拍子に腰に掛けていたデッキケースからカードまでもが飛び出す。

「いっつてっ……」

「んも〜何やってんのよ。ほら立ってるっ」

そこでミカの目に入ってきたのは一枚の白のカード。

ハジメは基本的には赤を中心に構築しているのでそのカードはあまりに意外なものだった。

「これって、月光龍と月光神龍じゃない。どうしてハジメ君持ってるの？」

「んーよくわかんないんだよね。なんか気がついたら俺丘の方について、そこにこのカードも落ちていたってわけ」

ハジメは頭をガシガシと搔いて、こぼれたカードを再びデッキケースにしまう。

そしてミカが持つその二枚のカードに手をかけると、少し真剣な表

情になった。

「でもなんか……俺にとってこのカードはかなり大事なモノなんだ。これを持っていると、誰かが俺を見守ってくれているような気がして……俺の知ってる、誰かが」

「フッフ奇遇ね。なんか私もそのカード見てると、誰かを思い出しそうな気がするわ。今まですぐ近くにいたはずの誰かを、ね」

二人は何気なしに外に出て夏の空気を吸った。

辺りからは蝉の音がせわしなく聞こえてきて騒がしいばかりである。

「あっ！　月！　昼なのに月があるぜ姉御！」

そんな時ハジメは空に浮かぶ蒼白の月を見つけた。

まるで昼に輝く月を見るのは初めてのようににはしゃぐ。

それを見て、ミカは微かに笑顔を作った。

「当たり前よ。月はいつだって地球をグルグルと回っているんだから。いつでもどこでも私達を見守ってくれているのよっ」

そう、月は消えることはない。

昼だろうが夜だろうが。

未来だろうが過去だろうが。

じつして常にそこにある。

にっして

自分たちを見守ってくれるかのようだ。

o n r i g h t } T h e h e r o o f m  
完